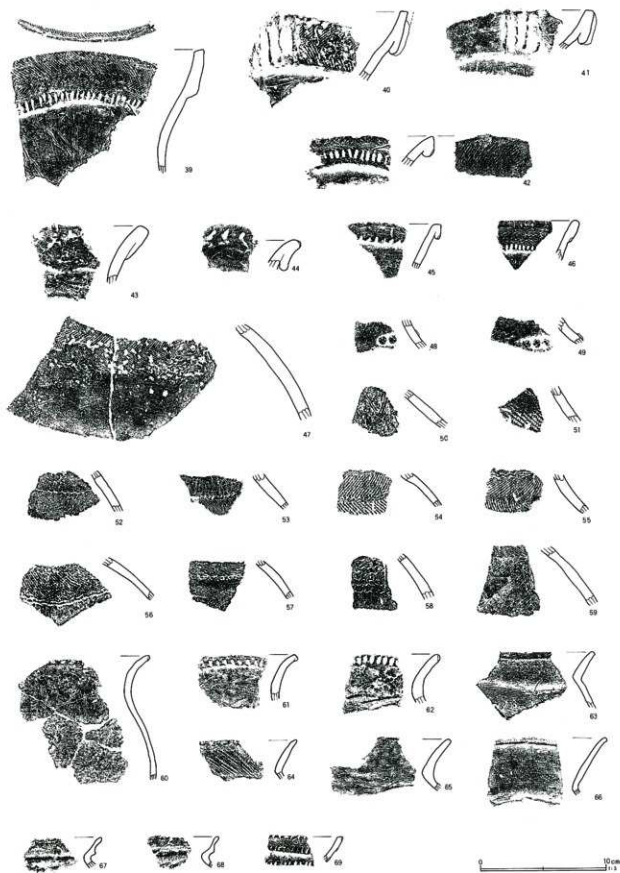
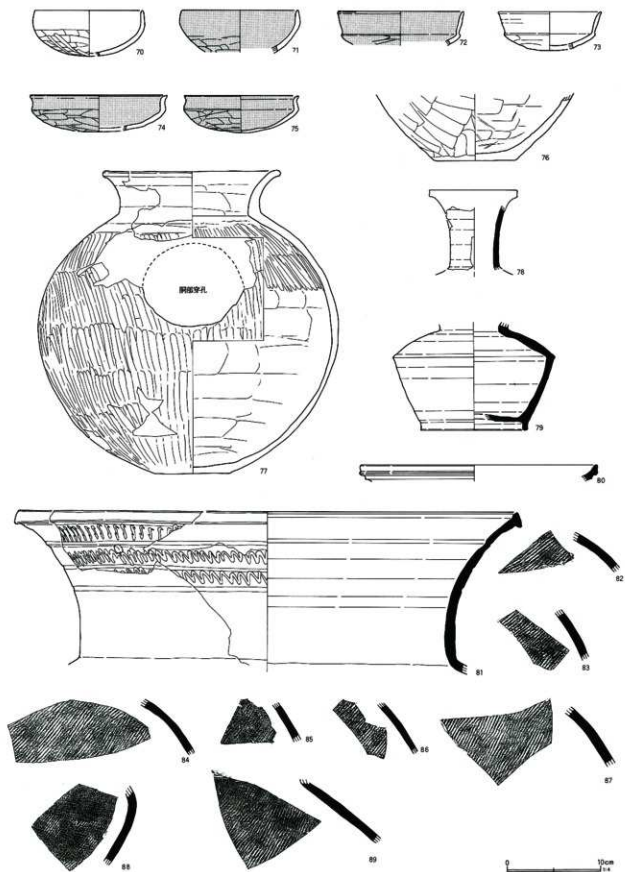


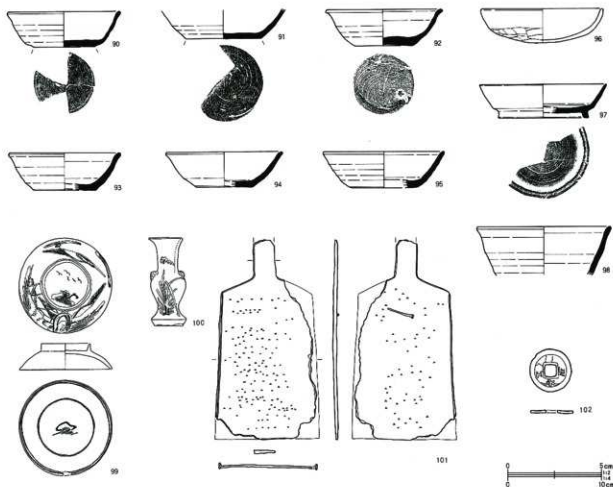
第55図 第1号墳出土遺物(2)



第56图 第1号墳出土遺物 (3)



第57図 第1号墳出土遺物(4)



二重の突帯が巡り、口唇部が立ち上がる。

81は須恵器大甕の頸部以上の破片である。82~84が同位置からまとめて出土しており、81と同一個体の胴部破片になるものと思われる。口縁部は折り返し状の突帯になり、口唇部が立ち上がる。口縁部外面には等間隔に浅い沈線が3条巡り、上から1条目には直下に凸線が1条沿う。その後、各沈線間には波長の短い波状文が施文され、凸線にはボタン状貼付文が1個つく。頸部無文部は横ナデ後、よく鏡ナデされる。内面は口縁部に1条の凹線が巡り、器面全体に丁寧な水平方向の横ナデが施される。胴部破片は外面に木目状の叩きめ、内面には同心円状の押さえ痕が見られる。

85~89は須恵器甕の胴部破片である。86は外面に自然軸が付着し、88は叩き締めた後、内外面とも横ナデされる。

第3群 (第57図90~98)

奈良・平安時代の土器を一括する。調査区南部に同時代の住居跡が検出されており、古墳の周溝が埋まりきる以前の段階で、集落から投棄されたものと考えられる。

90~95は須恵器環である。90、91は底部調整が全面回転鏡削り、92~94は底部調整が回転糸切りである。図示しなかったが、回転糸切り後、周辺鏡削りの底部破片も4点出土した。96は土師器環で、体部が鏡削りされる。97は高台付環である。全面回転鏡削り後、高台を貼り付けている。98は深みの高台付環の破片と思われる。

第4群 (第57図99~102)

周溝内の同一の攪乱から出土した遺物である。C-2グリッドの周溝内に位置する直径1.2m、深さ約

第1号墳出土遺物観察表(第54・55図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考	
1	壺	(18.2)			B	にふい褐	A	15		
2	壺	(18.9)			W	にふい黄橙	B	25		
3	壺				W雲	にふい橙	A	20		
4	壺				褐雲	明赤褐	A	25		
5	壺	(13.0)			褐	にふい黄橙	A	25		
6	壺	(12.4)			BW	にふい橙	A	20		
7	台付甕	(24.6)			W褐	にふい橙	B	30		
8	甕	(21.4)			BW	にふい赤褐	A	15		
9	台付甕	(21.1)			W雲	明赤褐	B	45		
10	台付甕	(19.1)			BW	明赤褐	A	15		
11	台付甕	(19.1)			BW	明赤褐	A	20		
12	台付甕	(16.3)			W	にふい赤褐	A	15		
13	台付甕	(23.1)			B雲	にふい赤褐	A	20		
14	台付甕	(19.5)			W雲	にふい褐	A	25		
15	台付甕			(8.0)	W雲	明赤褐	A	25		
16	台付甕			(9.0)	W	明赤褐	A	70		
17	台付甕			(11.0)	W雲	明赤褐	A	40		
18	台付甕			(10.3)	W雲	明赤褐	A	100		
19	高環	(21.3)			W雲	にふい赤褐	A	30		
20	高環	(18.1)			W	明赤褐	A	10		
21	高環	(11.6)			W	明赤褐	A	15		
22	高環	(9.8)			褐	にふい赤褐	B	20		
23	高環				W	赤褐	A	25		
24	高環			(10.9)	B R	にふい橙	A	50		
25	高環				R	にふい橙	B	40		
26	高環				W雲	にふい橙	A	60		
27	高環				BW	にふい黄橙	A	80		
28	高環				褐	赤褐	B	40		
29	高環				褐	明赤褐	A	25		
30	高環				褐	暗赤	A			
31	器台	(8.0)	(6.6)		W	淡黄	A	60		口縁部 円孔4ヶ所
32	器台				W	橙	A	20		
33	器台	(7.9)			W雲	にふい橙	A	50		円孔3ヶ所
34	器台	(6.9)			W	明赤褐	A	40		
35	器台	(8.4)			BW雲	赤褐	A	25		
36	器台	(7.0)			BW雲	明褐	B	25		
37	鉄製品	長さ2.9cm	幅3.1cm	厚さ4mm	重量16.55g				用途不明	
38	鉄製品	長さ6.1cm	幅1.1cm	重量11.24g				用途不明		
39	壺				W雲	にふい赤褐	A		口縁部 赤彩(頸部・内面)	
40	壺				褐	にふい黄橙	B		口縁部 赤彩(頸部・口唇部・内面)	
41	壺				W褐	明黄褐	C		口縁部 赤彩(頸部・内面)	
42	壺				W褐	にふい黄橙	B		口縁部 円形朱文(径9mm・口縁部・内面)	
43	壺				褐雲	明褐	B		口縁部	
44	壺				W	橙	B		口縁部	
45	壺				W	灰黄褐	A		口縁部	
46	壺				R	にふい黄橙	B		口縁部	

30cmの撈乱で、調査時点では撈乱として扱ったが、近世の土壌だった可能性もある。

99は近世陶器の蓋と思われる。外面には染め付けによる風景画が描かれる。100は花瓶で、染め付けによる表裏同一の模様か描かれる。

101は銅製のおろし金である。全体の形状は羽子板

状を呈するものと思われ、柄部と側縁を一部欠損する。薄い銅板を加工し、側縁を二重に折り返し、両面におろし面を作り出す。爪刺は表面が細かく、裏面が粗く起こされ、打ち抜きは認められない。裏面に鉄釘が附着する。102は銅銭である。錆が著しく、X線写真により寛永通宝の文字が判読できた。

第1号墳出土遺物観察表 (第55-57図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考	
47	壺				W雲	橙	B		胴部 赤彩(無文部)	
48	壺				W	にふい褐	B		胴部	
49	壺				W	にふい赤褐	B		胴部	
50	壺				W	にふい黄橙	A		胴部 赤彩(沈線区画下位)	
51	壺				雲W	にふい褐	A		胴部 赤彩(中間無文部)	
52	壺				W雲	黒褐	A		胴部	
53	壺				雲W	にふい黄橙	B		胴部 円形朱文(上部)	
54	壺				雲W	にふい黄橙	B		胴部 円形朱文(上部)	
55	壺				W雲	明褐	A		胴部	
56	壺				褐	にふい黄橙	A		胴部 赤彩(下位無文部)	
57	壺				W	にふい黄橙	B		胴部 赤彩(無文部)	
58	壺				W	にふい黄橙	A		胴部 赤彩(下位無文部)	
59	壺				BW	にふい黄橙	A		胴部 赤彩(下位無文部)	
60	甕				褐雲	黒褐	A		口縁~胴部	
61	甕				W雲	暗褐	A		口縁部	
62	甕					にふい黄橙	B		口縁部	
63	甕				W雲	褐灰白	A		口縁部	
64	甕				W雲	橙	A		口縁部	
65	甕				W雲	黒褐	A		口縁部	
66	甕				W雲	にふい褐	A		口縁部	
67	甕				雲W	明黄褐	A		口縁部	
68	甕				W雲	にふい黄褐	A		口縁部	
69	環				W	明褐	A		口縁部	
70	環	(11.5)	(4.9)		BW雲	赤褐	A	25		
71	環	(12.4)	(5.0)		BW	明赤褐	A	40		
72	環	(13.5)			W雲	暗赤褐	A	10		
73	環	(11.0)	(4.1)		BW雲	にふい褐	B	20		
74	環	(14.8)			BW	赤褐	A	50		
75	環	12.2	3.9		BW雲	赤褐	A	90		
76	甕			(8.4)	B	橙	A	50		
77	壺	19.0	32.0	8.1	BW	にふい黄橙	A	90		
78	長頸壺				BW	暗緑灰	A	20		
79	長頸瓶			(11.4)	BW	オリーブ灰	A	70		
80	甕	(25.3)			W	灰	A			
81	大甕	(54.0)			W	灰	A	25	No82~84同一個体	
82	甕				W	灰白	A			
83	甕				W	にふい黄	A			
84	甕				W	灰白	A			
85	甕				W	黄灰	A			
86	甕				W	灰白	A			
87	甕				W	灰	A			
88	甕				W	灰	A			
89	須恵器環	(12.1)	3.8	6.5	針	灰	A	40	全面回転彫り	
90	須恵器環			8.0	針	オリーブ灰	A	70	全面回転彫り	
91	須恵器環	12.5	3.8	6.2	針	灰	A	90	底部回転糸切り痕	
92	須恵器環	(12.0)	(4.0)	(6.4)	W針	灰白	A	15	底部回転糸切り痕	
93	須恵器環	(12.5)	(3.7)	(6.0)	BW針	灰白	A	15	底部回転糸切り痕	
94	須恵器環	(13.0)	(3.8)	(6.9)	W針	灰	A	25	底部調整痕不明	
95	環	(13.1)	3.7		BW	にふい黄橙	B	70		
96	高台付環	(13.6)	3.6	(9.7)	W針	オリーブ灰	A	60	底部回転彫り後高台貼付	
97	高台付環	(14.5)			W	灰	A	25		
98	蓋	9.9	2.8			白	A	100	5区攪乱 把手径5.3cm	
99	花瓶	3.7	9.3	3.0		白	A	100	5区攪乱	
100	おろし金	全長21.1cm 最大幅11.0cm 厚さ2~3cm 重量160g								5区攪乱
101	銅銭	直径2.3cm 厚さ1.5mm 貫穴径5mm 重量2.67g								5区攪乱 寛永通宝

4. 奈良・平安時代

第1号住居跡 (第58図)

E—7グリッドに位置する。北東—南西方向を主軸とする方形プランの住居跡であり、主軸方位はN—20°—Eを測る。

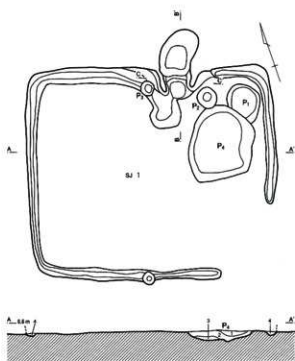
遺構の規模は、長辺4.0m、短辺3.4mを測る。検出面ですでに床面を削平しており、壁溝とカマドが残存している。周溝は南東隅部を除いて、ほぼ全周する。南壁のほぼ中央に小ピットを伴う。

カマドは北壁のやや東よりにあり、壁面から約60cm外へ出る形になる。両袖を有し、カマドの焚口部が床面より約10cm凹む。さらに焚口の西前方に壁溝につながる浅い掘り込みがあり、カマドの両袖際それぞれP₂とP₃を伴う。

P₄は土壌状の掘り込みであるが、本住居跡に伴うかどうかは不明である。主柱穴は検出されなかった。貯蔵穴にあたるものは、P₁と思われるが、深さは10cm未満で浅い。

出土遺物は須恵器坏の小片が数片出土した。この遺構の時期は、住居跡の形態と出土遺物から奈良・平安時代であると思われる。

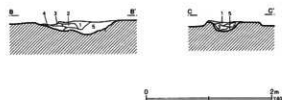
第58図 第1号住居跡



第2号住居跡 (第59・60図)

D・E—6グリッドに位置する。北東—南西方向を主軸とする方形プランの住居跡であり、主軸方位はN—25°—Eを測る。遺構の規模は、長辺4.0m、短辺3.1m、深さ8cmを測る。床面は平坦で、壁溝がカマド部分をのぞいて、ほぼ全周する。カマドは北壁の中央やや東よりに位置し、壁面から約40cm外に突出する。カマドの袖は、明確に検出できなかったが、壁溝がとぎれることから、本来はカマドの袖があったものと思われる。ピットは9基検出されたが、全て深さが10cmに満たない浅いものばかりで、主柱穴といえるものはない。P₅は覆土の堆積状況から、柱穴ではなく、開口したピットだった可能性が高い。P₁は浅い土壌状の掘り込みである。覆土は、本住居跡覆土に近似するが、焼土ブロックと同粒子が多量に含まれていた。本住居跡に伴うかどうかは不明である。住居跡の覆土は黄褐色ブロックを少量含む黒褐色土である。

出土遺物はカマド覆土から須恵器坏 (第60図1) と、甕の破片 (4) が出土した。この遺構の時期は出土遺物から奈良時代であると思われる。



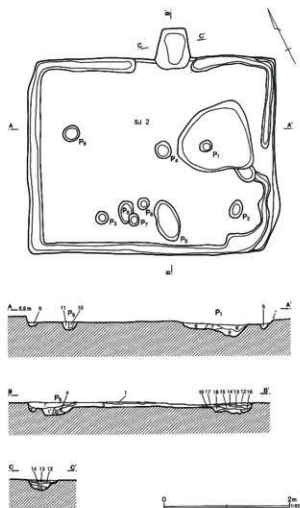
第1号住居跡 A—A'

- 1 暗褐色土 黄褐色粒子面に含み、ブロックも含む。しまり、粘性あり。
- 2 暗褐色土 黄褐色粒子、同ブロック多量。しまり、粘性あり。
- 3 暗褐色土 黄褐色粒子少量、同ブロックはなし。しまりなく、軟質、粘性も弱い。
- 4 暗黄褐色土 黄褐色土主体に、暗褐色ブロックが混入、固くしまりあり。

カマド B—B' C—C'

- 1 褐灰色土 日本産製成土で遺跡表土がブロック状に混入、覆瓦。
- 2 暗褐色土 焼土粒子中量、黄褐色ブロック多量。
- 3 黄褐色土 黄褐色ブロックを主体とし、焼土粒子少量、固くしまった土。
- 4 暗褐色土 焼土粒子少量、黄褐色ブロック多量。固くしまった土。
- 5 黄褐色土 黄褐色土を主体として、焼土ブロック、同粒子多量。暗褐色ブロック、同粒子多量。黒色土ブロック少量、粘性あり、しまった土。カマド上部の腐植土。

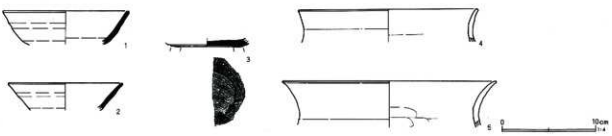
第59図 第2号住居跡



- 第2号住居跡 A-A' B-B' C-C'
- 1 暗褐色土 黄褐色粒子多量、同ブロック少量。焼土粒子中量、粘性、し
まりあり。1'は、焼土粒子を若干多め、また、黄褐色プロ
ックが含まれない。
 - 2 黄褐色土 黄褐色ブロック主体、黒褐色土(下層の上)が混合、焼土プロ
ック、同粒子少量。
 - 3 黒褐色土 黄褐色ブロック少量、同粒子少量、まばらに含む。焼土粒子、
炭化粒子少量、粘性、しまりあり。
 - 4 黄褐色土 黄褐色ブロック主体、黒褐色土が混合。炭化粒子、焼土粒子
中量。
 - 5 暗褐色土 黄褐色ブロックと同粒子多量、黒褐色土がブロック状に混合、
固くしまりあり。
 - 6 黒褐色土 黄褐色ブロック多量、同粒子中量、焼土粒子中量、粘性、し
まりあり。
 - 7 赤褐色土 焼土ブロックと同粒子多量、黄褐色ブロック中量、同粒子多
量、黒褐色土がブロック状に混合する。粘性、しまりあり。
 - 8 赤褐色土 同褐色土を互体として、焼土ブロック、同粒子ともに7層は
同質に含む。黒褐色土はブロック状に含むが、7層ほどでは
ない。粘性、しまりあり。
 - 9 黄褐色土 地山の崩壊またはうめどし、黒褐色土を所々に、ブロック
状に含む。粘性あり、しまりあり。
 - 10 暗黄褐色土 粘土と混む。含有物ほとんどなし。均質な土。
 - 11 黄褐色土 柱のまわりのうめどしと混む。地山の土、黒褐色粒
子を中量含む、固くしまった土。

- カマド B-B' C-C'
- 12 灰褐色土 灰主体、焼土ブロック多量、炭化粒子少量、しまり固。
 - 13 赤褐色土 焼土主体、一部焼土ブロック、しまり固。
 - 14 暗灰褐色土 灰主体、焼土粒子少量、しまり固。
 - 15 黄褐色土 黄褐色土主体、焼土粒子僅か、やや粘性あり。堅固。
 - 16 暗赤褐色土 黄褐色粒子少量、焼土ブロック多量、やや粘性あり。堅固。
 - 17 暗褐色土 焼土ブロック多量、黄褐色ブロック少量、粘性なく堅固。
 - 18 暗赤褐色土 焼土粒子主体、黄褐色粒子少量、炭化粒子僅か、やや粘性あ
り、しまりない。
 - 19 茶褐色土 焼土粒子少量、炭化粒子僅か、粘性なく堅固。

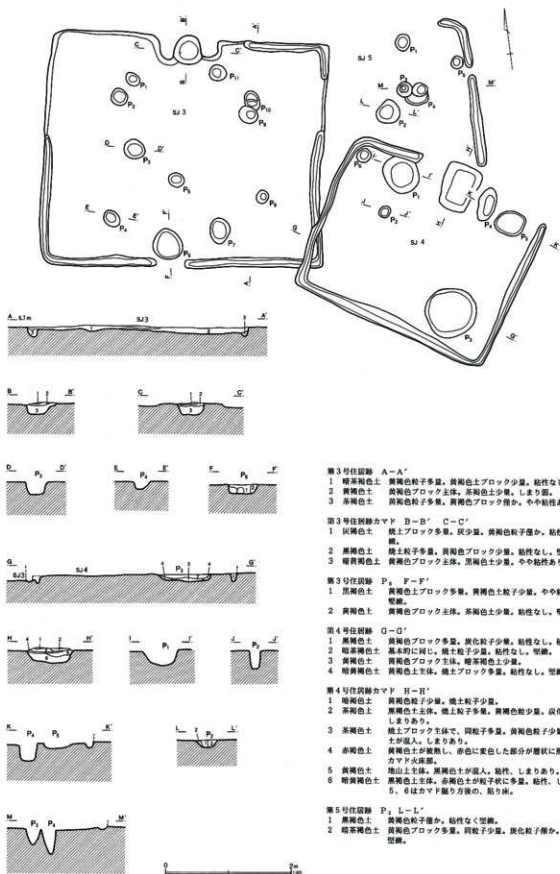
第60図 第2号住居跡出土遺物



第2号住居跡出土遺物観察表 (第60図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	須恵器環	(13.4)			針	灰白	A	15	カマド
2	須恵器環	(12.2)			針	灰白	A	20	
3	須恵器環			(7.7)	針	オリブ灰	A	40	底部回転転切り後周辺削り
4	甕	(19.2)			BW	橙	A	15	カマド
5	甕	(22.9)			W	橙	A	10	

第61図 第3～5号住居跡



第3号住居跡 A-A'

- 1 暗茶褐色土 黄褐色粒子多量、黄褐色土ブロック少量、粘性なし、空堀。
- 2 黄褐色土 黄褐色ブロック主体、赤褐色土少量、しまり面。
- 3 赤褐色土 黄褐色粒子多量、黄褐色ブロック層か、やや粘性あり、空堀。

第3号住居跡カマド B-B' C-C'

- 1 灰褐色土 焼土ブロック多量、灰少量、黄褐色粒子僅か、粘性なし、空堀。
- 2 黒褐色土 焼土粒子多量、黄褐色ブロック少量、粘性なし、空堀。
- 3 暗黄褐色土 黄褐色ブロック主体、黒褐色土少量、やや粘性あり、空堀。

第3号住居跡 P₁ F-F'

- 1 黒褐色土 黄褐色土ブロック多量、黄褐色土粒子少量、やや粘性あり、空堀。
- 2 黄褐色土 黄褐色ブロック主体、赤褐色土少量、粘性なし、空堀。

第4号住居跡 O-O'

- 1 黒褐色土 黄褐色ブロック多量、炭化粒子少量、粘性なし、極めて堅縮。
- 2 暗茶褐色土 基本的に同じ、焼土粒子少量、粘性なし、空堀。
- 3 黄褐色土 黄褐色ブロック主体、暗茶褐色土少量。
- 4 暗黄褐色土 黄褐色土主体、焼土ブロック多量、粘性なし、空堀。

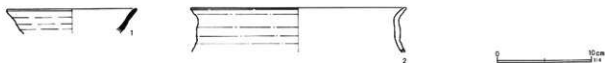
第4号住居跡カマド H-H'

- 1 暗褐色土 黄褐色粒子少量、焼土粒子少量。
 - 2 暗茶褐色土 黄褐色土主体、焼土粒子多量、黄褐色粒子少量、炭化粒子多量、しまり面あり。
 - 3 茶褐色土 焼土ブロック主体で、同粒子多量、黄褐色粒子少量、暗褐色土が混入、しまり面あり。
 - 4 赤褐色土 黄褐色土が凝結し、赤色に着色した部分が層状に形成する。カマド火床部。
 - 5 黄褐色土 焼山上土主体、黒褐色土が混入、粘性、しまりあり。
 - 6 暗黄褐色土 黄褐色土主体、赤褐色土が粒子状に多量、粘性、しまりあり。
- 5、6はカマド振り方後の、黏り面。

第5号住居跡 P₁ L-L'

- 1 黒褐色土 黄褐色粒子僅か、粘性なく空堀。
- 2 暗茶褐色土 黄褐色ブロック多量、同粒子少量、炭化粒子僅か、粘性なく空堀。

第62図 第4号住居跡出土遺物



第4号住居跡出土遺物観察表 (第62図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	須恵器環	(13.9)			W	褐灰	A	25	P ₁ P ₄ およびカマド
2	壺	23.0			BW雲	橙	A	15	

第3号住居跡 (第61図)

E-5グリッドに位置する。S J 4に切られており、この遺構はS J 4より古い。北東-南西方向を主軸とする方形プランの住居跡であり、主軸方位はN-12°-Eを測る。

遺構の規模は、長辺4.5m、短辺3.7m、深さ10cmを測る。床面は平坦である。壁溝は一部途切れるものの、北壁のカマド東側から、東、南、西壁の半分まで検出された。

カマドは北壁の中央に位置し、両側袖部もわずかながら検出できた。

ピットは11基検出された。そのうち主柱穴と思われるものは、位置的にP₂・P₄・P₁₀が考えられるが、深さ10~20cm程度で決定的とはいえない。P₉は、土層断面から柱痕が観察された。貯蔵穴は検出されなかった。住居の覆土は、黄褐色粒子を多量に含む暗褐色土である。

出土遺物は覆土中から、須恵器環片、土師器甕の口縁部などが出土したが、図示できるものはない。この遺構の時期は、住居跡の形態と出土遺物から奈良・平安時代であると思われる。

第4号住居跡 (第61・62図)

E-5・6グリッドに位置する。S J 3を切って構築されており、本住居跡はS J 3より新しい。北東-南西方向を主軸とする方形プランの住居跡であり、主軸方位はN-30°-Eを測る。

遺構の規模は、長辺3.4m、短辺2.6mを測る。覆土はほとんど遺存せず、壁溝とカマドが残存していることから、住居跡の存在を確認した。壁溝は本来全周し

ていたものと思われる。

カマドは北壁の中央に位置し、わずかに火焼部の凹みがある。

ピットは6基検出されたが、主柱穴は不明である。貯蔵穴は位置的にP₁またはP₉があたりたものと思われる。P₂は、底面の平坦な土壌状の掘りこみで、底面からは多量の焼土ブロックが検出された。本住居跡に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物は、カマド内から土師器甕の口縁部 (第62図2)、P₁覆土中から、須恵器環片 (1) が出土した。この遺構の時期は、出土遺物から平安時代であると思われる。

第5号住居跡 (第61図)

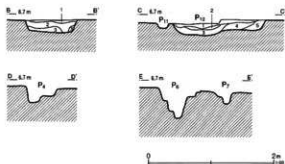
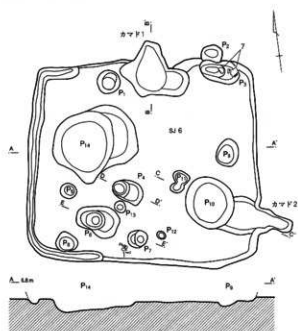
E-5グリッドに位置する。S J 3・4・6と重複するが、新旧関係は不明である。方形プランの住居跡と推定される。主軸方位、遺構の規模はともに不明である。覆土が削平された状態で床面は遺存せず、壁溝とピットだけがわずかに検出された。ピットは5基検出され、P₂では柱痕が観察された。主柱穴は不明である。出土遺物もなく、遺構の時期も判断できないが、方形プランであることと、S J 3・4・6と重複した状況から、奈良・平安時代の枠に収まるものとしておきたい。

第6号住居跡 (第63・64図)

E-5グリッドに位置する。S J 5と重複するが、新旧関係は不明である。北東-南西方向を主軸とする方形プランの住居跡であり、主軸方位はN-12°-Eを測る。

遺構の規模は、長辺3.6m、短辺2.7m、深さ13cmを

第63図 第6号住居跡



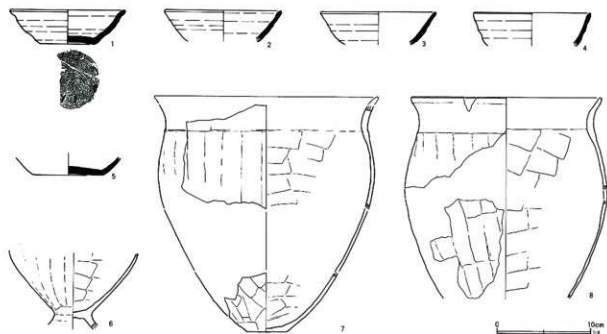
第6号住居跡 カマド1 B-B'

- 1 灰褐色土 焼土ブロック多量、炭化物少量、粘性なく硬密、しまり堅い。
- 2 暗黄褐色土 黄褐色ブロック多量、焼土ブロック少量、粘性なく堅密、火床面。
- 3 黄褐色土 黄褐色土主体、茶褐色土少量、焼土粒子少量、やや粘性、堅密。

カマド2 C-C'

- 1 暗茶褐色土 黄褐色粒子少量、焼土粒子僅か、粘性なく堅密。
- 2 灰褐色土 灰、炭化物多量、焼土粒子少量、黄褐色ブロック僅か、粘性なく、しまり堅い。
- 3 暗赤褐色土 焼土ブロック多量、炭化物少量、黄褐色ブロック少量、やや粘性あり、堅密、火床面。
- 4 暗黄褐色土 黄褐色ブロック多量、焼土粒子僅か、粘性なく堅密。
- 5 茶褐色土 黄褐色ブロック少量、粘性なく堅密。

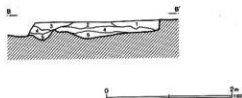
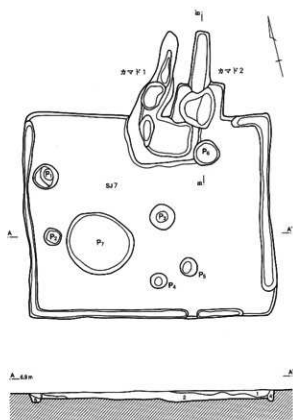
第64図 第6号住居跡出土遺物



第6号住居跡出土遺物観察表 (第64図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	須恵器環	12.2	3.6	5.8	W針	緑灰	A	55	底部回転糸切り痕
2	須恵器環	(12.6)			W針	暗緑灰	A	25	
3	須恵器環	(12.2)	(7.7)		W針	緑灰	A	25	P ₁₀
4	須恵器環	(12.5)			W針	暗緑灰	A	30	
5	須恵器環				雲	灰白	B	100	底部回転糸切り痕(摩耗)
6	甕		(24.9)	4.3	BW	橙	A	60	P ₁₀
7	甕	(24.0)			BW	橙	A	40	P ₃
8	甕	(20.3)			BW	橙	A	25	P ₁₀

第65図 第7号住居跡



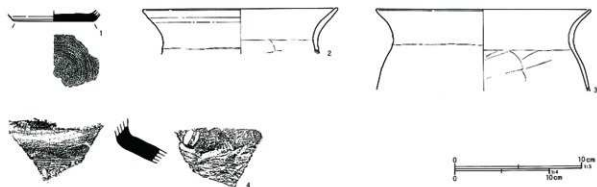
第7号住居跡 A-A'

- 1 暗褐色土 黄褐色ブロック、同粒子多量。焼土粒子少量。固くしまりあり。
- 2 暗黄褐色土 黄褐色ブロック多量。同粒子中量。固くしまりあり。
- 3 黄褐色土 堆山の土が主体。暗褐色土、黒褐色土をブロック状、粒子状に含む。固くしまりあり。
- 4 暗褐色土 黄褐色ブロック、同粒子中に含む。焼土粒子中量。粘性あり。
- 5 暗褐色土 4に近似的だが、焼土ブロック含む。

カマド B-B'

- 1 暗赤褐色土 黄褐色粒子多量。焼土粒子少量。黒褐色ブロック少量。
- 2 暗赤褐色土 焼土ブロック。同粒子多量。炭化物少量。固くしまりあり。
- 3 暗黄褐色土 上部に黄褐色ブロック、下部に黄褐色土が堆積。焼土粒子、炭化物を含む。
- 4 赤褐色土 焼土ブロック、同粒子多量。黄褐色ブロック多量。同粒子、黒褐色ブロック中量。
- 5 黄褐色土 焼土ブロック多量。黒褐色粒子混入する。粘性、しまりあり。

第66図 第7号住居跡出土遺物



第7号住居跡出土遺物観察表 (第66図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	須恵器環			(8.3)	針	緑灰	A	25	底部全面回転削り
2	須恵器鉢	(20.9)			BW雲	橙	B	40	カマド2および周辺
3	須恵器鉢	(22.9)			BW	黄橙	B	15	カマド2および周辺
4	須恵器甕				W	によい黄濁	A		頸部

測る。床面は平坦であり、壁溝は西壁と北西隅、南西隅に一部検出された。

カマドは北壁中央と東壁の南東隅部近くに各1基検出された。それぞれ煙道が壁面から外に伸びる。袖部は検出されなかった。カマド2はP₁₀に連結しており、一体の構造となる。

ビットは小さいものも含めて14基検出され、うち7基が南西部に分布する。P₆はしっかりしているが、主柱穴かどうかは不明である。貯蔵穴にあたるものはP₃であると思われる。P₁₄は、不整形な土塊状の掘りこみである。覆土から底面にかけて、焼土ブロックと焼土粒子を含む。住居跡に伴うものかどうかは不明である。住居跡の覆土は黄褐色粒子を多量に含む茶褐色土である。

P₁₀から土師器甕(第64図6・8)と須恵器環(3)が出土した。P₃からは、土師器甕の破片が出土した。遺構の時期は出土遺物から平安時代と思われる。

第7号住居跡(第65・66図)

E-4グリッドに位置する。北東-南西方向を主軸とする方形プランの住居跡であり、主軸方位はN-12°-Eを測る。遺構の規模は、長辺3.9m、短辺3.2m、深さ16cmを測る。床面は西半部がやや低くなる。壁溝は東、南、西壁の3辺に検出された。

カマドは北壁中央と東よりに合計2基検出された。

カマド1は、覆土が黄褐色ブロック主体で形状が整わず、カマド2の覆土には火床部が認められることから、カマド1からカマド2への作り替えが行われたものと思われる。

ビットは7基検出された。いずれも深さ約10cm前後の浅いビットである。貯蔵穴は検出されなかった。P₇は浅い土塊状の掘り込みである。覆土中に、炭化物と焼土粒子を多量に含む。本住居跡に伴うかどうかは不明である。住居跡の覆土は黄褐色ブロックを多量に含む暗褐色土である。

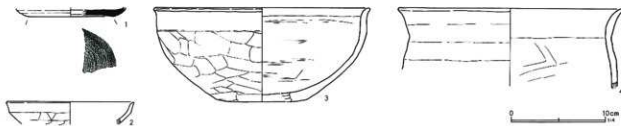
出土遺物はカマド2およびその周辺部から、土師器甕(第66図2・3)が出土した。この遺構の時期は、出土遺物から奈良時代であると思われる。

第8号住居跡(第67・68図)

F-4グリッドに位置する。S J 9に切られており、この遺構はS J 9より古い。カマドの一部と、北東隅部が調査区域外に出る。北東-南西方向を主軸とする方形プランの住居跡と推定される。主軸方位はN-13°-Eを測る。

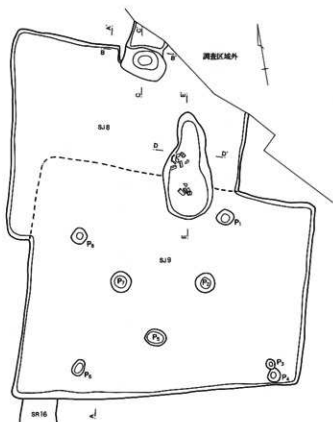
遺構の規模は、長辺3.7m、短辺3.3m、深さ21cmを測る。床面は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。カマドは北壁中央に位置し、

第67図 第8号住居跡出土遺物



第8号住居跡出土遺物観察表(第67図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	須恵器環			(8.1)	針	灰黄褐	A	20	底部全面回転彫り
2	環	(13.7)			W雲	にふい褐	A	20	
3	鉢	(23.0)	(10.0)	(9.7)	B雲	にふい黄褐	A	50	カマド
4	甕	(23.9)			W	浅黄橙	A	15	



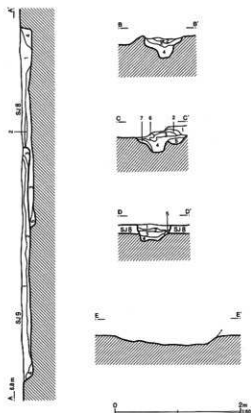
- 第8号住居跡 A-A'
- 暗褐色土 黄褐色粒子多量、焼土粒子少量、炭化物中量。
 - 暗黄褐色土 黄褐色が層状にうすく堆積。暗褐色土との混合。
 - 暗褐色土 黄褐色ブロックを多く含む。陶粒子多量、炭化物少量。
 - 暗褐色土 黄褐色土を多く含む。黄褐色ブロック多量、陶粒子多量。固くしまりあり。
 - 暗黄褐色土 暗褐色土を主体とし、黄褐色ブロック、焼土粒子、炭化物粒子含む。固くしまりあり。
- 第8号住居跡カマド B-B' C-C'
- 淡黄褐色土 黄褐色粒子多量、焼土ブロック少量、炭化物粒子僅少、粘性なく堅固。
 - 黒褐色土 黄褐色粒子多量、炭化、焼土粒子少量、粘性なく堅固。
 - 暗褐色土 焼土ブロック多量、黒褐色土少量、やや粘性あり、緻密。
 - 灰褐色土 焼土粒子多量、黄褐色ブロック少量、やや粘性あり、緻密。
 - 黒色土 黄褐色粒子少量、焼土粒子僅少、やや粘性あり、緻密。

左側袖部が若干遺存する。ピットは検出されず、主柱穴は不明である。住居跡の覆土は黄褐色ブロックを含む暗褐色土である。カマド覆土から、鉢（第67図3）が出土した。

この遺構の時期は、出土遺物から奈良時代であると思われる。

第9号住居跡（第68・69図）

F-4・5グリッドに位置する。SJ8、SR16を切って構築されており、本住居跡はSJ8、SR16より新しい。北東—南西方向を主軸とする方形プランの住居跡であり、主軸方位はN-15°-Eを測る。



- 第9号住居跡 A-A'
- 暗褐色土 黄褐色ブロック多量、陶粒子多量、焼土粒子少量。
 - 暗褐色土 炭褐色土多量、焼土粒子中量。
 - 暗褐色土 黄褐色土を多く含む。焼土粒子、陶ブロック含む。
 - 暗黄褐色土 黄褐色ブロック主体、固くしまりあり。
- 第9号住居跡カマド D-D'
- 暗褐色土 焼土粒子、陶ブロック多量、粘性なく堅固。
 - 暗褐色土 焼土粒子、炭化物多量、粘性なく緻密。
 - 黒褐色土 焼土ブロック主体、灰多量、やや粘性あり、緻密。
 - 暗黄褐色土 黄褐色ブロック多量、焼土ブロック少量、やや粘性あり、堅固。
 - 黒褐色土 黄褐色ブロック多量、粘性なく堅固。

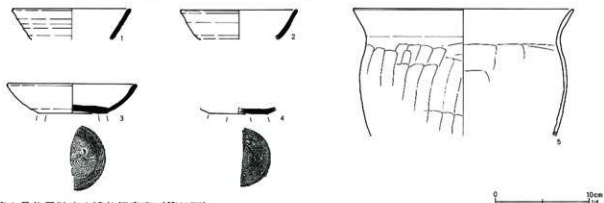
遺構の規模は、長辺4.8m、短辺2.9m、深さ14cmを測る。壁溝は検出されなかった。

カマドは北壁中央に位置する。深さ約20cmのピットが8基検出されたが主柱穴は不明である。貯蔵穴は検出されなかった。住居跡の覆土は黄褐色ブロックを含む暗褐色土である。

出土遺物はカマド覆土から土師器甕（第69図5）と須恵器坏片（1・2）が出土した他、住居跡覆土中から、須恵器坏の破片が2個体出土した。この遺構の時期は、出土遺物から奈良時代であると思われる。

SJ8・9は、重複した住居跡であるが、両遺構と

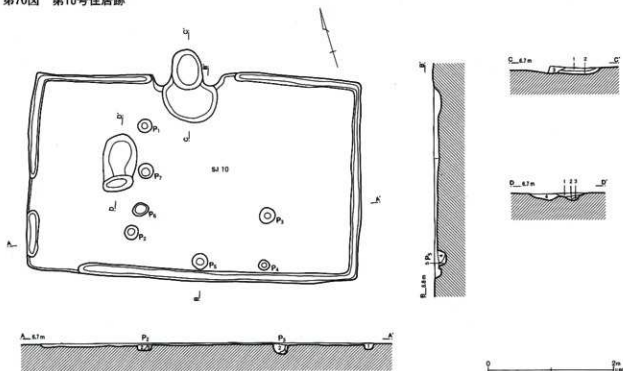
第69図 第9号住居跡出土遺物



第9号住居跡出土遺物観察表 (第69図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	須恵器(環)	(12.6)			W針	オリーブ灰	A	25	カマド
2	須恵器(環)	(12.4)			W	黄灰	A	20	カマド
3	須恵器(環)	(13.8)	3.1	(7.3)	針	緑灰	A	25	底部回転糸切り後周辺寛削り
4	須恵器(環)			(6.2)	W針	暗灰黄	A	50	底部回転糸切り後周辺寛削り
5	甕	(23.5)			W	橙	B	40	カマド

第70図 第10号住居跡



第10号住居跡 A-A' B-B'

- 1 暗褐色土 固くしまった土。黄褐色ブロック多量。同粒子多量。
- 2 黒褐色土 黄褐色粒子を含む。粘性あり。
- 3 黄褐色土 黄褐色ブロック主体。粘性あり。
- 4 黒褐色土 黄褐色ブロック多量。同粒子多量。焼土粒少量。
- 5 黄褐色土 黄褐色土主体。暗褐色土少量混入。軟質土。粘性あり。

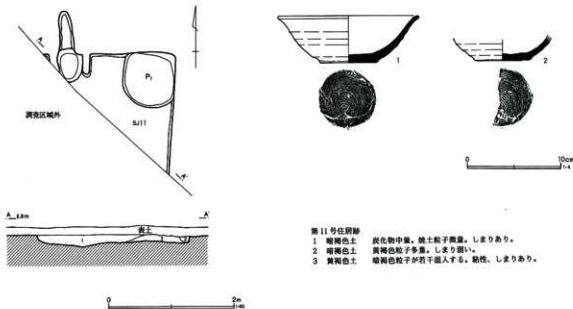
カマド C-C'

- 1 茶褐色土 焼土ブロック多量。焼土粒子多量。黄褐色土混入。炭化物多量。
- 2 黄褐色土 黄褐色土を主体とし、暗褐色粒子。同ブロック少量混入。上層にうすく焼熱した赤褐色部が残る。粘性。しまりあり。
- 3 暗褐色土 S10層土。1層に同じだが、焼土粒子質量に混入。

炉跡 D-D'

- 1 暗褐色土 黄褐色ブロック少量。同粒子多量。焼土粒子中量。粘性。しまりあり。
- 2 黄褐色土 暗褐色粒子多量。下部に焼土粒子中量。炭化物微量。粘性あり。
- 3 赤褐色土 焼土ブロック主体。黄褐色土。暗褐色土混入。
- 4 黄褐色土 焼土粒子中量。同ブロック少量。黄褐色粒子中量。炭化物少量。粘性。しまりあり。

第71図 第11号住居跡・出土遺物



第11号住居跡出土遺物観察表 (第71図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	須恵器環	15.1	5.0	6.0	W	にぶい黄橙	B	80	P ₁ 底部回転糸切り痕
2	須恵器環			(5.0)	W	灰白	A	30	P ₁ 底部回転糸切り痕

も奈良時代のもとの推定され、カマドの向きを示す主軸もほぼ同じ方向を示している。壁溝がなく、住居の形態も共通することから、時期的に非常に近いものと思われる。

第10号住居跡 (第70図)

F-5・6グリッドに位置する。北東-南西方向を主軸とする長方形プランの住居跡であり、主軸方位はN-18°-Eを測る。

遺構の規模は、長辺5.2m、短辺3.2m、深さ8cmを測る。床面は確認面ですでに床面が検出された状態で、カマドの掘り込みと壁溝が残存する。壁溝は本来全周していたものと思われる。

カマドは北壁中央に位置し、両袖部がわずかに残る。西部の床面上には炉跡が検出された。

ビットは7基検出された。深さは10-20cmである。貯蔵穴は検出されなかった。土師器片が少量出土したことから、この遺構の時期は奈良・平安時代であると思われる。

第11号住居跡 (第71図)

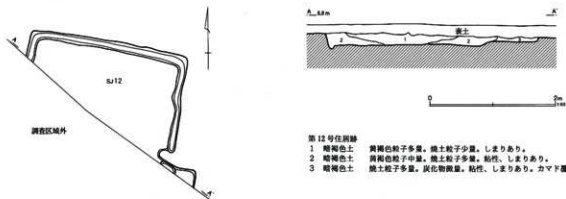
D・E-8グリッドに位置する。本住居跡のすぐ南側には、奈良時代の住居跡と推定されるS J12が近接している。南側のほとんどが調査区域外に及ぶため、全容は不明であるが、南北方向を主軸とする方形プランの住居跡になるものと推定される。主軸方位はN-2°-Eを測る。

遺構の規模は、長辺が現存で2.4m、短辺が現存で1.8m、深さ22cmを測る。床面は平坦である。壁溝は検出されなかった。

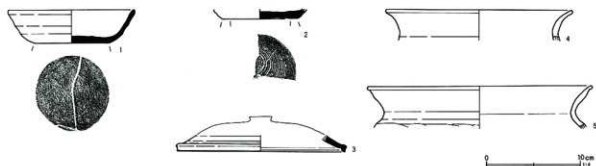
カマドは北壁に位置し、煙道が長く伸びて両袖部が残る。主柱穴と思われるビットは検出されなかった。貯蔵穴は、P₁が位置的にそれにあたるが、深さが10cmに満たない浅い掘り込みである。住居跡の覆土は焼土粒子をわずかに含む暗褐色土である。

出土遺物はP₁の覆土中から須恵器環(第71図1・2)が出土した。この遺構の時期は出土遺物から平安時代であると思われる。

第72図 第12号住居跡



第73図 第12号住居跡出土遺物



第12号住居跡出土遺物観察表 (第73図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	須恵器環	(13.6)	3.5	8.0	W針	にぶい黄橙	B	80	床面 底部全面回転削り
2	須恵器環			8.0	W針	灰黄	A	25	底部回転糸切り後周辺削り
3	須恵器蓋	(18.0)			W	褐灰	A	10	
4	甕	(20.0)			W雲	にぶい橙	A	10	カマド
5	甕	(24.0)			BW雲	橙	A	15	カマド

第12号住居跡 (第72・73図)

E-8・9グリッドに位置する。約半分が調査区域外に及ぶため全容は把握できないが、南東-北西方向を主軸とする方形プランと推定される。主軸方位はS-78°-Eを測る。

遺構の規模は、長辺が現存で2.5m、短辺が現存で1.7m、深さ18cmを測る。床面は平坦であり、壁溝は3辺をめぐって検出された。カマドは東壁に位置し、壁面から約40cm外に伸びる。袖部がわずかに残る。主柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。住居跡の覆土は焼土粒子を多量に含む暗褐色土である。

出土遺物はカマド覆土から土師器甕の一部 (第73

図4・5) が、カマド正面の床面上から、須恵器環 (1) が出土した。これらの出土遺物から、この遺構の時期は奈良時代であると思われる。

以上、検出された12軒の住居跡は、全て奈良・平安時代のもので推定される。調査区中央部のやや東よりから南東部にかけて、帯状に分布し、低地に向かう傾斜面に沿って位置する。住居が営まれた当時、また形跡をとどめていたであろうSS1の墳丘を北側にひかえて位置することは、集落の景観として注目される。また、S J12を除く全ての住居跡のカマドの向きが北東方向である点で共通している。

5. 近世以降

(1) 溝

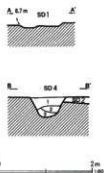
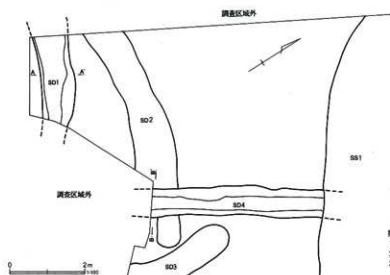
第1号溝 (第74図)

A-5グリッドに位置する。東西方向にややゆるやかにカーブしながら伸びる。溝の幅0.9m、深さ27cmを測る。溝の断面は底面にやや段差がつく。覆土は表土に近似する暗褐色土である。遺物は出土しなかった。この溝の時期は、覆土の状況から近世以降で、現代に限りなく近い時期のものであると思われる。

第4号溝 (第74図)

A-4グリッドからA-5グリッドにかけて位置する。SD2と古墳跡であるSS1を切って構築される。北東-南西方向に真っすぐ伸びており、溝の幅0.8m、深さ57cmを測る。溝の断面は逆台形である。覆土は暗

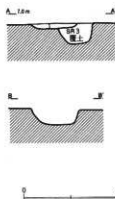
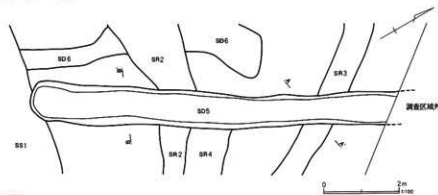
第74図 第1・4号溝



第4号溝 B-D'

- 1 赤褐色土 黄褐色ブロック多量、堅緻。
- 2 暗茶褐色土 黄褐色ブロック多量、黄褐色砂子少量、堅緻。
- 3 黄褐色土 黄褐色ブロック主体、暗茶褐色土少量。

第75図 第5号溝



第5号溝

- 1 黒褐色土 黄褐色砂子多量、同ブロック少量、粘性なく堅緻。

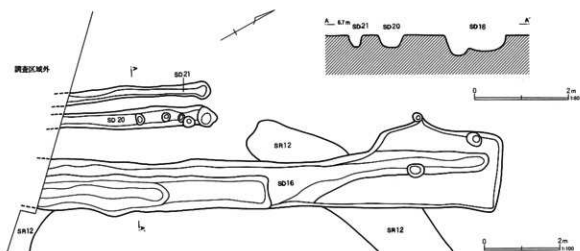
茶褐色土である。出土遺物は土師器片とともに、近・現代の陶器が出土した。この遺構の時期は、出土遺物から近・現代である。

第5号溝 (第75図)

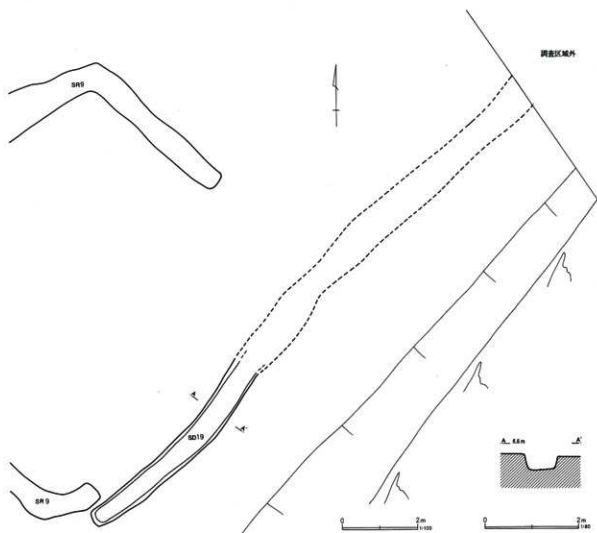
C-1グリッドからC-2グリッドにかけて位置する。SS1、SR2・3・4を切って構築される。北東-南西方向に向かって真っすぐ伸びて、SS1に重複する部分で途切れる。溝の幅1.1m、深さ31cmを測る。溝の断面は浅いU字形である。覆土は黄褐色土を多量に含む黒色土である。

出土遺物は、土師器片とともに、近・現代の陶器が出土した。この遺構の時期は、出土遺物から近・現代である。

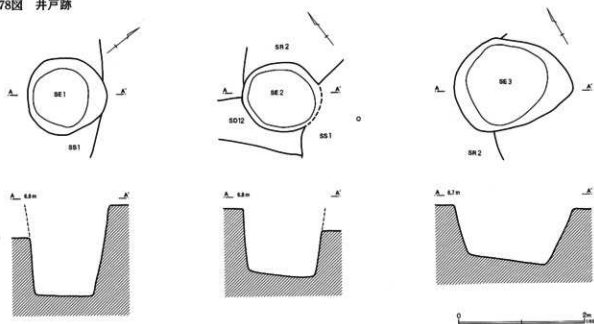
第76图 第16・20・21号溝



第77图 第19号溝



第78図 井戸跡



第18・20・21号溝 (第76図)

C-5グリッドからC-6グリッドにかけて位置する。SD16はSR12を切って構築される。北東-南西方向に向かってまっすぐ伸びる。3本の溝は平行して伸びており、同時期の関連する遺構と考えられる。

SD16は溝の幅2.1m、深さ26cmを測る。溝の断面は何度も掘り直されたような段差がつく。覆土は表土に近似した暗灰褐色土である。出土遺物は土師器片とともに、現代陶器片が出土した。

SD20は小ピットを伴っている。溝の幅0.5m、深さ30cmを測る。SD21は溝の幅0.4m、深さ28cmを測る。溝の断面は、SD20・21ともにU字形である。これらの溝の時期は、SD16の出土遺物から近・現代であると思われる。

第19号溝 (第77図)

G-6・7グリッドからF-7グリッドにかけて位置する。SR9調査中に検出されたため、当初SR9の一部かと思われたが、覆土が異なることと、SR9南隅部から繋がらないため、異なる溝と判断した。調査区東西部の地山傾斜面に沿って伸びる。全長は現存で16.3m、幅0.7m、深さ35cmを測る。溝の断面は箱形である。出土遺物は土師器片が少量出土したが、遺構の時期を決定づけるものはない。

(2) 井戸跡 (第78図)

第1号井戸跡

C-2グリッドに位置する。SS1を切って構築される。平面形は楕円形である。長軸2.6m、短軸2.4m、深さ1.4mを測る。長軸方位はN-33°Eを測る。底面は平坦であり、壁はやや開いて立ち上がる。遺物は出土しなかった。

第2号井戸跡

B-2グリッドに位置する。SS1、SD12を切って構築される。平面形は楕円形である。長軸2.6m、短軸2.2m、深さ1mを測る。長軸方位はN-37°Eを測る。底面はやや一方に傾斜する。壁はやや開いて立ち上がる。遺物は出土しなかった。

第3号井戸跡

B・C-2グリッドに位置する。SR2を切って構築される。平面形は楕円形である。長軸4.0m、短軸2.9m、深さ96cmを測る。長軸方位はN-27°Eを測る。底面はやや一方に傾斜する。壁はやや開いてゆるやかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

以上、3基の井戸跡は、覆土が比較的新しい時期に埋め戻された状態であることから、近・現代のものと考えられる。

新旧対照表

遺構名	旧名	時期	遺構名	旧名	時期	
第1号住居跡	第17号周溝 第18号周溝	奈良・平安時代	第4号溝	第9号周溝	近・現代	
第2号住居跡		奈良時代	第5号溝		近・現代	
第3号住居跡		奈良・平安時代	第6号溝		弥生時代後期～古墳時代前期	
第4号住居跡		平安時代	第7号溝		弥生時代後期～古墳時代前期	
第5号住居跡		奈良・平安時代	第8号溝		弥生時代後期～古墳時代前期	
第6号住居跡		平安時代	第9号溝		弥生時代後期～古墳時代前期	
第7号住居跡		奈良時代	第10号溝		弥生時代後期～古墳時代前期	
第8号住居跡		奈良時代	第11号溝		弥生時代後期～古墳時代前期	
第9号住居跡		奈良時代	第12号溝		弥生時代後期～古墳時代前期	
第10号住居跡		奈良・平安時代	第13号溝		弥生時代後期～古墳時代前期	
第11号住居跡		平安時代	第14号溝		弥生時代後期～古墳時代前期	
第12号住居跡		奈良時代	第15号溝		弥生時代後期～古墳時代前期	
第1号墳		古墳時代後期	第16号溝		近・現代	
第1号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第17号溝		第19号周溝	弥生時代後期～古墳時代前期
第2号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第18号溝		弥生時代後期～古墳時代前期	
第3号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第19号溝		近・現代	
第4号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第20号溝		近・現代	
第5号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第21号溝		近・現代	
第6号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第1号土壇		弥生時代後期～古墳時代前期	
第7号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第2号土壇	弥生時代後期～古墳時代前期		
第8号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第3号土壇	古墳時代前期		
第9号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第4号土壇	古墳時代前期		
第10号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第5号土壇	弥生時代後期～古墳時代前期		
第11号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第6号土壇	弥生時代後期～古墳時代前期		
第12号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第7号土壇	弥生時代後期～古墳時代前期		
第13号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第8号土壇	古墳時代前期		
第14号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第9号土壇	弥生時代後期～古墳時代前期		
第15号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第10号土壇	弥生時代後期～古墳時代前期		
第16号周溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第1号井戸跡	近・現代		
第1号溝		近・現代	第2号井戸跡	近・現代		
第2号溝		弥生時代後期～古墳時代前期	第3号井戸跡	近・現代		
第3号溝		弥生時代後期～古墳時代前期				

IV 神田天神後遺跡

1. 遺跡の概要

神田天神後遺跡は、浦和市西部に広がる荒川低地内の自然堤防上に立地する。遺跡の標高は6mを測り、北部の谷部との比高差は2mである。

遺跡範囲内の大部分が、現在テニスコートや運動場として使用されているが、今回調査したのは遺跡範囲の南西部、運動場に接する荒地部分823m²である。調査区内は南西から北東に向かって緩やかに低くなる平坦面であるが、北部では傾斜面になっている。また、調査区の境に沿った西側部分は攪乱されていた。

基本土層は、調査区北部の傾斜面にかかる個所を图示した。(第79図)第V層以下が水平堆積であり、第I層から第IV層までが谷部に向かって傾斜堆積する。第I層が表土層、第IV層が弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層、第V層がローム古地の地山に相当する層である。平坦面では地表下30~40cmで第V層の上面に達し、遺構の掘り込みを確認した。

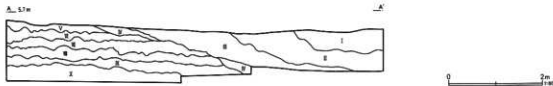
今回の調査の結果、検出された遺構は住居跡11軒、掘立柱建物跡1棟、土壇10基、溝9条、ピット29基である。

時代別には、弥生時代後期の土壇3基、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土壇2基、古墳時代前期第79図 神田天神後遺跡基本土層

期の住居跡8軒と土壇1基および単独のピット1基、古墳時代後期の住居跡1軒、古墳時代後期以降の溝3条、平安時代の住居跡1軒と掘立柱建物跡1棟である。

住居跡は調査区内の平坦面から重複して検出された。遺構を確認した段階ですでに覆土は浅く、住居跡の深さは11~17cmのものが多く、深くても30cmに満たない。古墳時代前期の住居跡は、隅丸方形のプランで4本柱が検出されたものが多い。S J 6・7・8からは床面から覆土中にかけて最も多く遺物が出土した。S J 2はカマドが検出されず、溝と切り合っていて全容が明確ではないが、出土遺物から古墳時代後期の住居跡と考えられる。S J 10は北壁にカマドを持つ住居跡で、カマドとその周辺の床面から平安時代の甕、須恵器環が出土した。S B 1は南北方向に長軸をとる掘立柱建物跡である。長辺が3間となるが西側が攪乱となり、全容が明確ではない。出土遺物はないが、覆土の状況とS J 10と主軸を同じくすることから平安時代の遺構と考えたい。

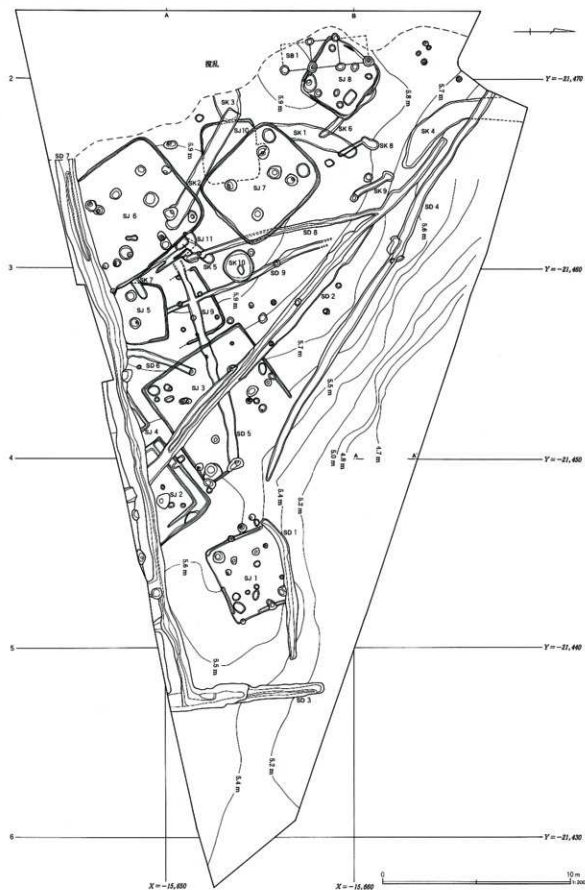
土壇は全部で10基検出された。分布は調査区の西半部に偏在している。ほとんどのものが、古墳時代前期の住居跡に切られている。S K 3・4からは弥生時代



基本土層

- | | | | |
|------------------|--|--------------------|---|
| I 褐色色(10YR5/1) | 粘性にとも、鉄分の腐葉物が斑状に、多量に散じる。竹葉を若干、近・現代の陶器片などを含む。 | VI 灰黄褐色(10YR5/2) | 粘性にとも、V層と同じく鉄分の腐葉物を多量に含む。色調はV層よりも黒味を帯びる。 |
| II 灰色(5Y4/1) | 粘性にとも、I層よりも灰色味の濃い粘土ブロックを多量に含む。竹葉を多量に含む。鉄分の腐葉物多い。 | VII 灰黄褐色(10YR5/2) | V層と同じく鉄分の腐葉物を多量に含む。 |
| III 褐色色(10YR5/1) | 粘性にとも、I層よりもやや褐色味が強い。しまり強く、断面大径の江戸産の粘土ブロックを含む。 | VIII 灰黄褐色(10YR5/2) | 色調はV層よりも黒味が強く、V層よりも強い。粘性や内包物はV層と同様にだが、有機質の腐葉物のような粒子が多くあり、そのためV層よりも黒味が強くなる。 |
| IV 黒褐色(10YR3/1) | I層以下の層をブロック状に含む。しまり強く、本遺跡での発生~古墳時代の遺物出土層、谷に向かって厚く堆積する。(以上付帯埋没土) | IX 灰黄褐色(10YR5/2) | 色調は黒味がV層よりも弱く、V層よりも強い。粘性に比べて、有機質の腐葉物をV層よりも多量に含んでいる。また灰色の粘土ブロック状に多く含むようになり、次のX層へと移行する。 |
| V 灰黄褐色(10YR5/2) | 粘性にとも、鉄分の腐葉物を多量に含む。灰色の粘土粒のものも混在を成す。全体に粘性の硬質土ようであるがI~IV層とは異なって水平堆積をしている。ローム相当層の裏層と思われる。 | X 青灰色(10B6/1) | 青灰色の粘土層。鉄分の腐葉物をV層と同様に多量に含む。赤茶けた斑状を成す。 |

第80図 神田天神後遺跡全体図



後期の遺物が多く出土し、SK2はSK3に切られていることから、これらの遺構は弥生時代後期のものと考えられる。SK5は古墳時代前期の小型壺の破片が出土しており、古墳時代前期の土壌とした。土壌の形状は、細長く伸びることが共通しており、SK1・4はカーブしながら伸びていることから、あるいは期溝の一部だった可能性もある。

溝は全部で9条検出された。重複関係の不明なものを除いては、全ての溝が古墳時代前期の住居跡を切って構築されている。また、SD7が古墳時代後期以降のものであることを除いては、他の溝は出土遺物も少量で、遺構の時期は不明である。溝の規模を見ると、ほとんどのものが幅0.5～1m未満であり、深さも20cm代をこえるものはなく幅狭で浅めの溝が多い一方

で、SD3・5・7は、幅、深さともに大きく比較的しっかりと掘り込まれた印象がある。溝の伸びる方向を見ると、SD1・2・4・8・9が調査区内のコンタラインに沿って伸びるのに対し、SD3・5・7は、互いに平行または直角に接続する関係にある。これらのことから、SD3・5・7は、同時期の関連する遺構であると考えられる。

単独のピットは29基検出された。古墳時代前期の遺構であるB-2GP₁の1基を除いては出土遺物がなく、遺構の時期は明確ではないが、多くのピットの覆土が住居跡の覆土に近似することから、時期的には古墳時代前期から平安時代の間に収まるものと考えられる。土層断面で柱痕を確認できたものが多く、あるいは掘立柱建物跡が住居跡の痕跡だった可能性もある。

2. 住居跡・掘立柱建物跡

第1号住居跡 (第81・82図)

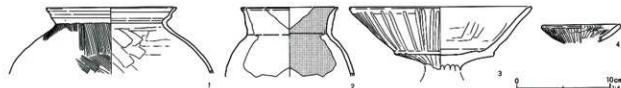
B-4グリッドに位置し、検出された住居跡の中で最も東にある。

SD1に切られており、この遺構はSD1より古い。北東-南西方向を主軸とする方形プランの住居跡であり、主軸方位はN-65°-Eを測る。

遺構の規模は、長辺4.2m、短辺は現存で3.3m、深さ14cmを測る。

床面はほぼ平坦で、壁は、確認面から床面までの深さが少ないため、一部明確ではないが、垂直に立ち上が

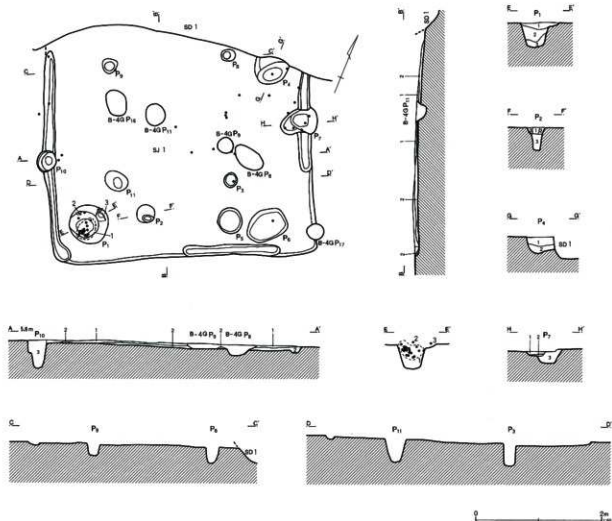
第81図 第1号住居跡出土遺物



第1号住居跡出土遺物観察表 (第81図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	台付甕	(13.9)			B	にぶい黄橙	B	30	P ₁ 覆土中層
2	小型壺	(10.4)			W	橙	A	15	P ₁ 覆土上層
3	高環	19.4			W	にぶい赤褐	A	60	床面～P ₁ 落ち際
4	器台	(8.4)			褐	にぶい橙	A	20	P ₁

第82図 第1号住居跡



第1号住居跡 A-A' B-B'

- P₁ F-F'
- 1 暗灰褐色土 炭化物、焼土粒子を少量含む。灰褐色粒子、黄灰褐色粒子を混入する。粘性あり。しまり良。
 - 2 黄灰褐色土 炭褐色粒子、暗灰褐色粒子、ブロックを少量混入。粘性あり。しまり良。
 - 3 暗灰褐色土 1層より暗い。炭化物を少量含む。黄灰褐色小ブロック、粒子を少量混入。粘性あり。しまり良。

P₁ E-E'

- 1 暗灰褐色土 少量の炭化物を含む。黄灰褐色粒子、暗灰褐色粒子を少量混入。粘性あり。しまり良。
- 2 黄灰褐色土 少量の炭化物を含む。黄灰褐色粒子、暗灰褐色粒子を少量混入。粘性あり。しまり良。
- 3 黄灰褐色土 炭化物、黄土ブロックを含む。黄灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。

P₁ F-F'

- 1 黄灰褐色土 黄灰褐色土主体。暗灰褐色土を混入。粘性あり。しまり良。
- 2 暗灰褐色土 黄灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。
- 3 灰褐色土 黄灰褐色粒子、暗灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。

P₁ G-G'

- 1 暗灰褐色土 焼土粒子をごく少量含む。黄灰褐色粒子、暗灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。
- 2 暗灰褐色土 黄灰褐色粒子を多く混入。粘性あり。しまり良。

P₁ H-H'

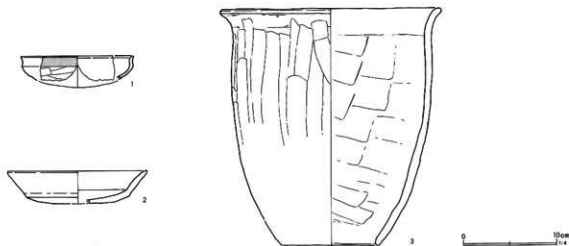
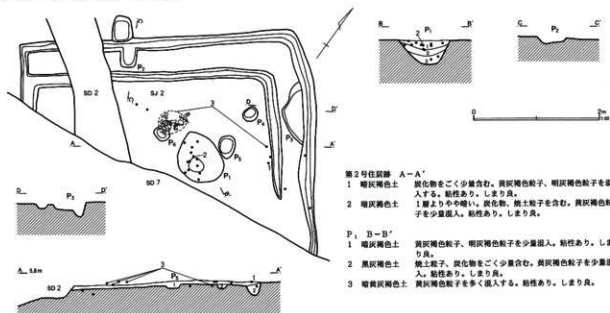
- 1 暗灰褐色土 黄灰褐色粒子、暗灰褐色粒子、小ブロックを混入。粘性あり。しまり良。
- 2 黄灰褐色土 暗灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。
- 3 暗灰褐色土 1層よりやや暗い。黄灰褐色粒子、暗灰褐色粒子を少量混入する。粘性あり。しまり良。

は斜め方向にハケメが施される。胴部内面は篋ナデされる。2は小型壺である。内面が赤彩される。本米、外面も赤彩されていたものと思われる。3は柱状脚部の高環で脚部を欠損する。環部の下位に稜線をもつ。外面は縦方向に篋磨きが施される。内面は横ナデされ

る。4は器台の破片である。口唇部は丸みをもつ。内外面ともに、丁寧に篋磨きされる。

この遺構の時期は、出土遺物から古墳時代前期であると推定される。

第83図 第2号住居跡・出土遺物



第2号住居跡出土遺物観察表 (第83図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	坏	(12.0)			W	明赤褐	A	15	P ₁ 覆土上層
2	坏	(14.9)	(3.5)		BW	浅黄橙	C	70	
3	甗	23.7	(25.0)	(10.5)	W	橙	A	55	

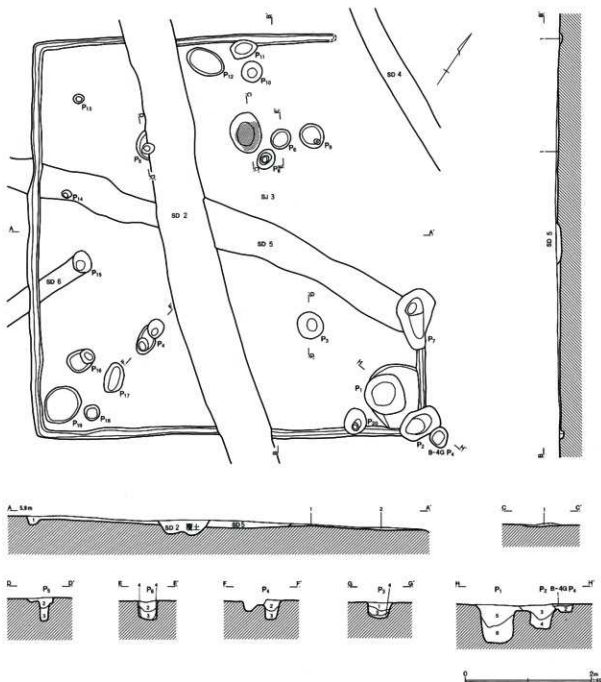
第2号住居跡 (第83図)

A・B-4グリッドに位置する。SD 2に切られており、この遺構はSD 2より古い。SD 7と重複するか新旧関係は不明である。北東-南西方向を主軸とする方形プランの住居跡であり、主軸方位はN-51°-Eを測る。遺構の規模は長辺4.6m、短辺は現存で3.5m、深さ11cmを測る。床面はほぼ平坦である。壁溝が二重に検出されたため、住居を拡張したものと思われる。

ピットは6基検出された。カマド、支柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。住居跡の覆土は炭化物を少量含む暗灰褐色土である。出土遺物は覆土下層から床面にかけて、横倒しに押しつぶされたような状態で甗(第83図3)が、P₁覆土内から坏(2)が出土した。

これらの出土遺物から、この遺構の時期は古墳時代後期であると推定される。

第84図 第3号住居跡



第3号住居跡 A-A' B-B'

- 1 暗灰褐色土 粘土粒子、炭化物を含む。黄灰褐色粒子、小ブロック、明灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。
 2 明灰褐色土 ごく少量の黄灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。

砂 C-C'

- 1 暗赤褐色土 粘土粒子、ブロックを多量に含む。褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子、暗灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。

P₁-₄ D-D'

- 1 灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子、明灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。
 2 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子、明灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。

3 暗灰褐色土

- 2層より薄い。黄灰褐色粒子をごく少量混入。粘性あり。しまり良。
 4 暗黄灰褐色土 黄灰褐色粒子を多く混入。粘性あり。しまり良。

P₅・P₆-B-40 P₈ H-H'

- 1 暗灰褐色土 黄灰褐色粒子、明灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。
 2 暗黄灰褐色土 黄灰褐色土主体。暗灰褐色粒子、ブロックを少量混入。粘性あり。しまり良。
 3 暗灰褐色土 1層より薄い。黄灰褐色粒子、ブロックを混入。明灰褐色土を混入。粘性あり。しまり良。
 4 暗黄灰褐色土 黄灰褐色ブロックを多く混入。粘性あり。しまり良。
 5 暗灰褐色土 黄灰褐色粒子を少量混入。粘性あり。しまり良。
 6 暗灰褐色土 黄灰褐色粒子を多く混入。粘性あり。しまり良。

第3号住居跡出土遺物観察表 (第85図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	小型土器			(4.0)	BW	灰褐色	A	30	口縁部
2	甕				W	明褐色	A		

第85図 第3号住居跡出土遺物



第3号住居跡 (第84・85図)

B-3グリッドに位置する。SD 2、SD 5に切られており、この遺構はSD 2、SD 5より古い。SD 6と重複するが、新旧関係は不明である。北西-南東方向を主軸とする方形プランの住居跡であり、主軸方位はN-38°-Wを測る。

遺構の規模は、長辺6.4m、短辺6.2m、深さ18cmを測る。床面はほぼ平坦である。遺構確認面からの掘り込みは浅く、壁はほとんど遺存しない。壁溝は北側が検出できなかったが、本来は全周していたものと思われる。炉跡は中央から北西壁によった個所で、薄い焼土層を検出した。主柱穴はP₃・P₄・P₅・P₆と思われる。住居跡の覆土は、焼土粒子と炭化物を含む暗灰褐色土である。

出土遺物は、覆土下層から床面、P₁とP₂の覆土中から、古墳時代前期の土器片が出土している。1は小型

土器であるが、外面は丁寧に磨きがかかる。2は変形土器の口縁部破片であり、口唇部にキザミをもち、頭部はくの字状に屈曲する。

この遺構の時期は出土遺物から古墳時代前期であると推定される。

第4号住居跡 (第86図)

A・B-4グリッドに位置する。SD 7に切られており、この遺構はSD 7より古い。壁溝をとまなう方形または長方形プランの住居跡であると推定される。SD 7に切れ、南部はさらに調査区域外にかかるため、全容は不明である。遺構の規模は、長辺は現存で2.1m、短辺は現存で0.4m、深さ11cmを測る。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

第5号住居跡 (第87・88図)

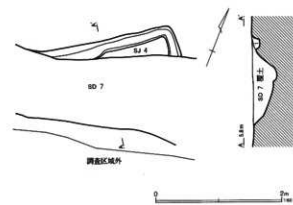
A-3グリッドに位置する。S J 6、SD 7、SD 9、SK 7と重複するが、新旧関係は不明である。北東-南西方向を主軸とする方形プランとなるが、西壁はまっすぐのびず、不安定である。主軸方位はN-80°-Eを測る。

遺構の規模は、長辺3.1m、短辺は現存で2.3m、深さ16cmを測る。床面は一部貼床が残るが不明瞭で、しっかりした床面は確認できなかった。壁溝は北側半分を確認された。炉跡は中央からやや南東よりに検出された。主柱穴は検出されなかった。P₁は貯蔵穴だった可能性がある。住居跡の覆土は、焼土粒子を少量含む暗褐色土である。

出土遺物はP₁の底面から高環 (第88図1) が横倒しの状態で出土した。覆土からは、古墳時代前期の土器片が少量出土した。1は小型高環で、脚部中に円孔が見られる。3は壺の胴部破片で、縄文帯を細い沈線区画し、その下に2段の鋸歯状沈線が施文される。

この遺構の時期は、出土遺物から古墳時代前期であると推定される。

第86図 第4号住居跡

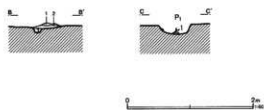
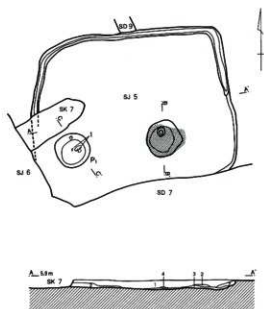


第4号住居跡

1 灰褐色土

黄褐色土、灰褐色粒子、小ブロックを混入、粘性あり、しまり良。

第87図 第5号住居跡



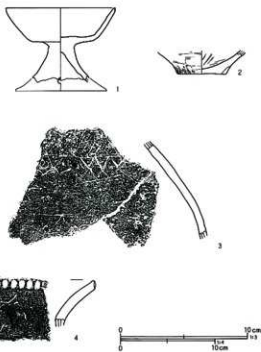
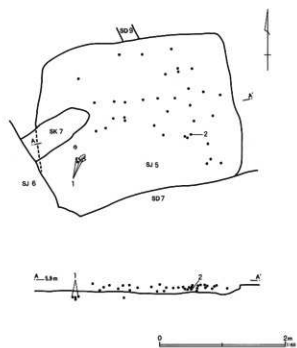
第5号住居跡 A-A'

- 1 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。焼土粒子、黄灰褐色粒子を少量混入。
- 2 暗灰褐色土 黄色味おける。焼土粒子を少量、褐色粒子、黄灰褐色粒子、小ブロック混入。
- 3 暗黄灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子、ブロックを少量混入。(粘土)
- 4 炭化物

剖面 B-B'

- 1 黒褐色土 炭化物を多量を含む。焼土粒子を少量含む。暗灰褐色土を混入。粘性なし。しまり高。
- 2 赤褐色土 褐色粒子を含む。焼土層。暗灰褐色土、黄灰褐色土を混入。粘性あり。しまり高。
- 3 暗灰褐色土 黄灰褐色粒子を混入。

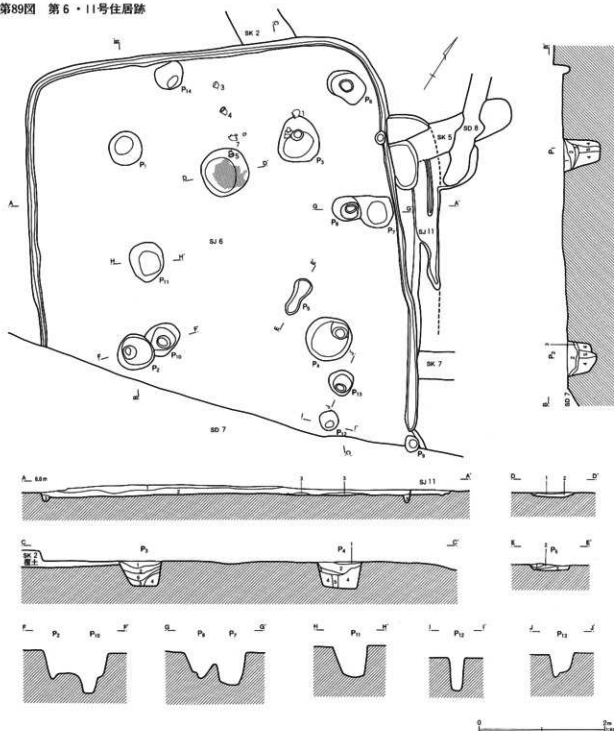
第88図 第5号住居跡遺物分布図・出土遺物



第5号住居跡出土遺物観察表 (第88図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	高環	11.6			RW	明赤褐	A	95	P;底面
2	壺			(5.1)	褐	明赤褐	A	50	覆土中層
3	壺				W	黒褐	B		胴部
4	壺				W雲	により黄橙	A		口縁部

第89図 第6・11号住居跡



第6号住居跡 B-B' C-C'

- 1 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子を少量混入。粘性あり。しまり良。
- 2 暗黄灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子、小ブロックを多く混入。粘性あり。しまり良。
- 3 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子をごく少量混入。粘性あり。しまり良。
- 4 暗黄灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子、ブロックを多く混入。粘性あり。しまり良。
- 5 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子をごく少量混入。
- 6 暗黄灰褐色土 黄灰褐色粒子、小ブロックを混入。粘性あり。しまり良。

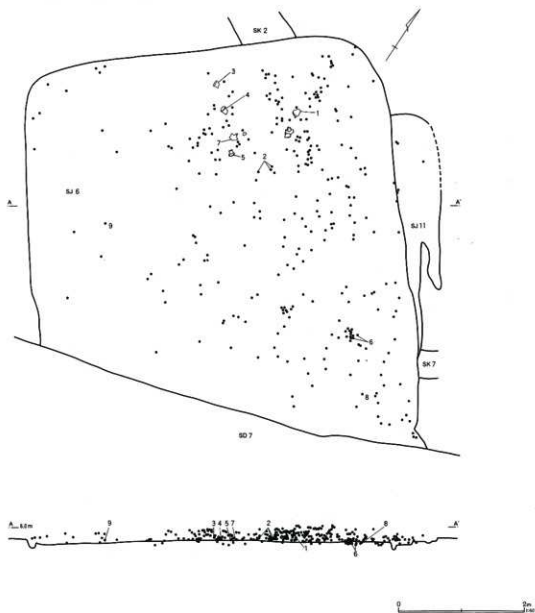
第6号住居跡 D-D'

- 1 暗褐色土 炭化物、焼土粒子を含む。粘性ややあり。しまり良。
- 2 赤褐色土 褐色粒子を含む。焼土層。黄灰褐色土が焼土化したもの。

第6号住居跡 A-A'

- 1 暗灰褐色土 焼土粒子を少量含む。黄灰褐色粒子を少量混入。粘性あり。しまり良。
 - 2 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子、小ブロックを混入。粘性あり。しまり良。
 - 3 暗灰褐色土 黄灰褐色粒子、小ブロックを多く混入。
- P₂ E-E'
- 1 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。焼土粒子、炭化物を少量含む。黄灰褐色粒子を少量混入。粘性あり。しまり良。
 - 2 黄灰褐色土 褐色粒子を含む。暗灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。
 - 3 暗赤褐色土 褐色粒子を含む。焼土粒子、ブロックを多く含む。黄灰褐色粒子、暗灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。

第90図 第6・11号住居跡遺物分布図



第6・11号住居跡 (第89～91図)

A・B-2グリッドに位置する。第6号住居跡はS J 11とSK 2を切って構築されており、この住居跡はS J 11とSK 2より新しい。SD 7と重複するが、新旧関係は不明である。北西-南東方向を主軸とする隅丸方形プランの住居跡であり、壁面の形は直線的になる。主軸方位はN-36°-Wを測る。

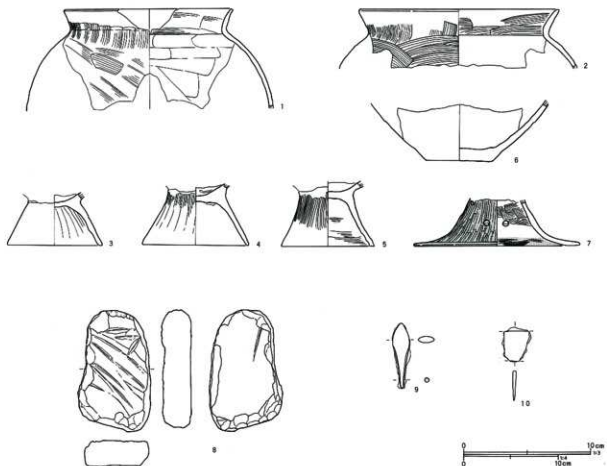
遺構の規模は、長辺は現存で6.3m、短辺5.9m、深さ23cmを測る。主柱穴は、P₁・P₂・P₃・P₄であると思われる。貯蔵穴は検出されなかった。床面はほぼ平

坦である。主柱穴を結ぶ線から、壁溝までの部分が粘土床となっている。壁溝はほぼ全周するものと思われる。中央からやや北壁よりに灰跡が検出された。住居跡の覆土は、焼土粒子を含む暗灰褐色土である。

出土遺物は、灰跡周辺から台付甕の脚台部 (第91図3～5) と高環脚部 (7) が、床面から砥石 (8) が出土した。また、覆土中から、鉄製品が (9、10) 出土した。

1、2は台付甕で、頸部が屈曲して内面に稜をもつ。口縁上半部の内外面が横ナデされ、ハケメをナデ消し

第91図 第6号住居跡出土遺物



第6号住居跡出土遺物観察表 (第91図)

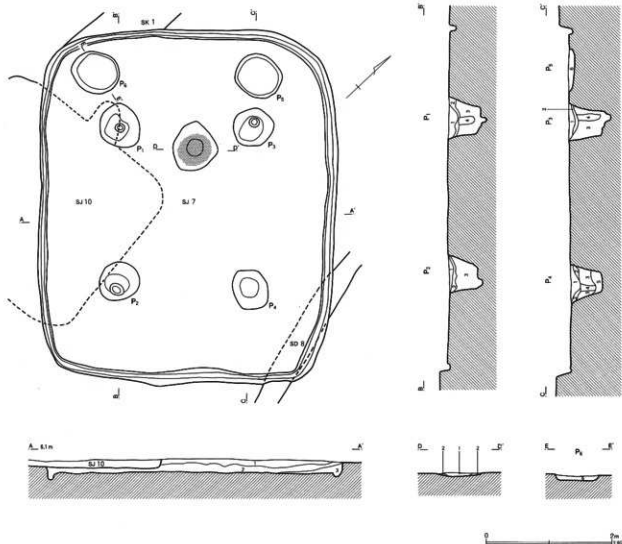
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	台付甕	(18.0)			W	明褐	A	35	覆土下層
2	台付甕	(21.2)			W	明褐	A	25	覆土下層
3	台付甕			10.1	BW	明赤褐	A	100	床面
4	台付甕			11.4	W	明赤褐	A	100	床面
5	台付甕			9.9	W	暗褐	A	100	床面
6	壺			(7.0)	褐	橙	A	25	床面
7	高坏			(17.7)	W	赤褐	A	30	床面
8	砥石	全長9.3cm	幅5.1cm	厚さ1.9cm			石質砂岩		床面
9	鉄鎌	全長5.2cm	幅0.8cm	厚さ5mm			重量8.16g		
10	刀子	幅2.4cm	厚さ3mm				重量5.16g		鉄製

ている。1の口唇部は面取りされ、平坦になる。7は、高坏の脚部で、円孔が互い違いに上位に4カ所、下位に4カ所巡る。外面は縦磨きされ、丁寧な仕上げである。8は砥石で、表面には多数の研ぎ痕とみられる凹みが見られ、裏面は平坦で滑らかな研ぎ面を残している。9は鉄鎌の完形品、10は刀子もしくは鎌の刃部と考えられる。

この遺構の時期は、出土遺物から古墳時代前期であると推定される。

第11号住居跡はS J 6に切られており、この遺構はS J 6より古い。SD 7、SK 5と重複するが、新旧関係は不明である。隅丸方形プランの住居跡であるが、ほとんどの部分をS J 6に切られており、全容は不明である。床面までの深さは、23cmを測る。床面はS J

第92図 第7号住居跡



第7号住居跡 A-A'

- 1 暗灰褐色土 炭化物を少量含む。黄灰褐色粒子を少量混入。粘性あり。しまり良。
- 2 暗灰褐色土 炭化物を少量含む。黄灰褐色粒子、ブロックを混入。2層より硬い。粘性あり。しまり良。
- 3 暗灰褐色土 2層より硬い。黄灰褐色粒子、黒灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。

B' D-D'

- 1 赤褐色土 炭化物を含む。褐色粒子を含む。焼土ブロックを多量に混入。黄灰褐色土、暗灰褐色土を少量混入。粘性あり。しまり良。
- 2 暗褐色土 黄灰褐色粒子を多く混入。粘性あり。しまり良。

第7号住居跡 B-B' C-C' E-E'

- 1 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子を混入。灰褐色土を少量混入。粘性あり。しまり良。
- 2 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子をごく少量混入。粘性あり。しまり良。
- 3 暗黄灰褐色土 褐色粒子を含む。暗灰褐色粒子、ブロック、黄灰褐色粒子、ブロックを多く混入。粘性あり。しまり良。
- 4 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。2層よりやや多く、黄褐色粒子、ブロックを混入。粘性あり。しまり良。
- 5 暗黄灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子を多く混入。粘性あり。しまり良。
- 6 黒灰褐色土 焼土粒子を少量と褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子、ブロックを多く混入。粘性あり。しまり良。

6 とほぼ同じ高さで平坦に遺存し、壁溝も一部検出された。

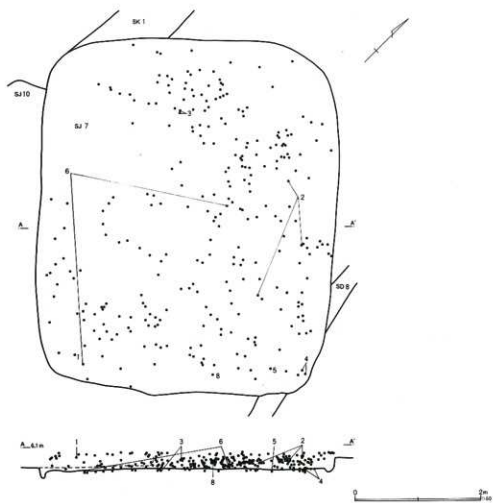
S J 6 内の P₃ は浅く底面の平らな掘りこみであり、覆土に焼土粒子と炭化物を含むため、位置的にも、S J 11 の跡跡だった可能性がある。主柱穴は P₈ と P₁₃ に

なるものと思われる。

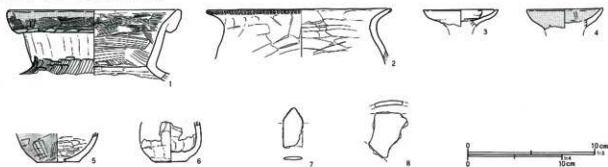
出土遺物は、覆土中から古墳時代前期の土器片が出土したが、図示できるものはない。

この遺構の時期は S J 6 に切られていることと、出土遺物から古墳時代前期であると推定される。

第93図 第7号住居跡遺物分布図



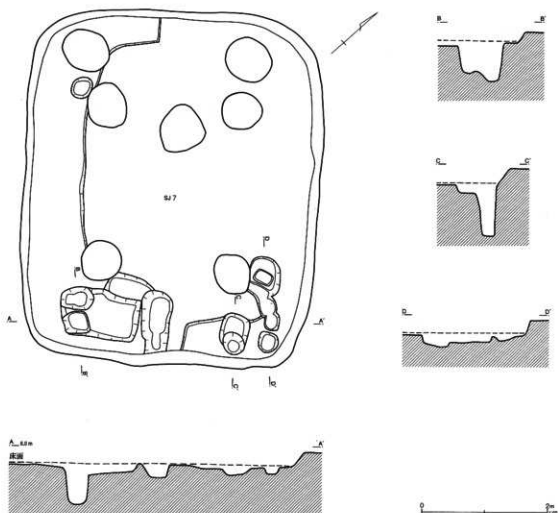
第94図 第7号住居跡出土遺物



第7号住居跡出土遺物観察表 (第94図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	壺	(18.6)			褐	明黄褐	A	25	覆土上層
2	台付鉢	(19.6)			褐	黒褐	A	25	覆土上層
3	器台	(8.0)			W	明赤褐	A	25	覆土上層～中層
4	器台	(8.2)			砂	赤	A	30	東隔壁際 床面
5	小型壺			(4.6)	W	赤褐	B	40	床面
6	手づくね			3.4	B	明褐	A	50	覆土上層～中層
7	無基鐵	全長3.1cm 幅1.5cm 厚さ3mm			重量3.06g				鉄製
8	不明板状品	厚さ4mm			重量10.96g				鉄製 用途不明

第95図 第7号住居跡掘り方



第7号住居跡 (第92~95図)

B-2グリッドに位置する。S J 10とSD 8に切られており、この遺構はS J 10とSD 8より古い。北西-南東方向を主軸とする隅丸方形プランの住居跡であり、壁面はほぼ直線的にのびる。平面形、主柱穴と炉跡の配置、壁溝の有りかたなどが、S J 6に対して相似形をとる。主軸方位はN-47°-Wを測る。

遺構の規模は、長辺5.6m、短辺4.7m、深さ23cmを測る。床面はほぼ平坦で、東壁から、南壁、西壁の一部にそって貼床をもつ。炉跡は中央からやや西壁よりに位置する。主柱穴は、P₁・P₂・P₃・P₄貯蔵穴は検出されなかった。住居跡の覆土は、炭化物を少量含む暗褐色土である。

出土遺物は覆土上層から床面にかけて、小型器台の

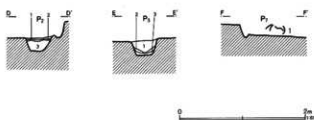
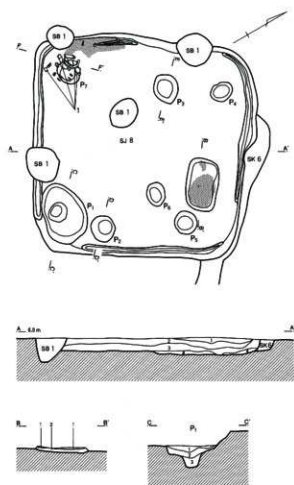
器受部 (第94図3、4)、壺口縁部 (1) をはじめ、古墳時代前期の遺物が出土した。

1は頸部でハの字状に屈曲して開き、複合口縁部分でさらに外に開く器形となる。内外面ともハケメ調整されるが、頸部のみハケメ後に横ナデされる。2は台付甕で、頸部が大きく括れて外に開く。口唇部にキザミが施され、内外面とも木口ナデされる。3、4は器台で、器面がよく磨かれている。4は内面、外面とも赤彩される。

7、8は鉄製品である。7は無銘蓋で返し部を片方欠損する。8は板状になるが用途は不明である。

この遺構の時期は、出土遺物から古墳時代前期であると推定される。

第96図 第8号住居跡



- 第8号住居跡 A-A'
- 1 暗灰褐色土 焼土粒子を少量混入、黄灰褐色粒子を少量混入、粘性あり、しまり良。
 - 2 暗灰褐色土 焼土粒子を少量混入、黄灰褐色粒子、小ブロックを多く混入、粘性あり、しまり良。
 - 3 黒灰褐色土 焼土粒子、炭化物、ブロックを含む、黄灰褐色粒子を混入、粘性あり、しまり良。
 - 4 暗黄灰褐色土 黄灰褐色粒子を多く混入、粘性あり、しまり良。

- B-B'
- 1 赤褐色土 焼土層、褐色粒子を含む、粘性あり、しまり良。
 - 2 暗灰褐色土 褐色粒子を含む、黄灰褐色粒子を多く混入、粘性あり、しまり良。

- P₁・P₂ C-C' D-D'
- 1 暗灰褐色土 黄灰褐色粒子を少量混入。
 - 2 暗灰褐色土 黄灰褐色粒子、小ブロックを多く混入。
 - 3 暗灰褐色土 黄灰褐色粒子を少量混入。

- P₃ E-E' F-F'
- 1 暗灰褐色土 褐色粒子を含む、黄灰褐色粒子、小ブロック、暗灰褐色小ブロックを混入、粘性あり、しまり良。
 - 2 暗灰褐色土 褐色粒子を含む、黄灰褐色粒子をごく少量混入、粘性あり、しまり良。
 - 3 暗黄灰褐色土 褐色粒子を含む、黄褐色粒子、ブロックを多く混入、粘性あり、しまり良。

第8号住居跡 (第96・97図)

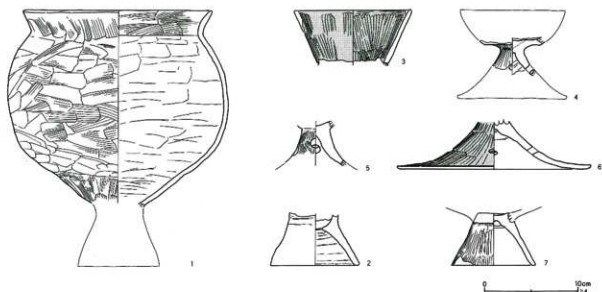
B・C-1・2グリッドに位置する。SB1に切られており、この遺構はSB1より古い。SK6を切つて構築されており、この住居跡はSK6より新しい。北西-南東方向を主軸とする隅丸方形プランの住居跡である。

遺構の規模は、一辺3.5m、深さ26cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁面にそつて、幅約50cmの範囲で貼床をもつ。西隅部の床面上では、焼土ブロックと炭化物が散乱した状態で検出されたことから、焼失住居であると推定される。北西壁の一部と他の3辺の壁面にそつて、浅い壁溝が検出された。調査時に炉跡としたものには掘りこみがなく、焼土の堆積が平面堆積である。位置的にはP₃が炉だった可能性もある。主柱穴と貯蔵穴は不明である。

住居跡の覆土は、焼土粒子を少量含む暗灰褐色土の上層と、焼土粒子と炭化物を含む黒灰褐色土の下層に分層される。

出土物は住居の東半分集中して分布している。東北部の炉跡とその周辺の覆土下層から床面上にかけて遺物があり、南西隅の覆土下層から台付甕(第97図1)がみつれた状態で出土し、台付甕の脚台部(2)は床面から出土した。1は台付甕で、口縁部が緩やかに開き、頸部内面に稜をもつ。外面の器面調整には、口縁部が縦ハケメ、胴部が横ハケメ、底部近くが縦ハケメとなり、胴部下位で接合したらしく、粘土を厚く加えてナデツケを行っている。内面は口縁部が横ハケメ、胴部は丁寧な木口ナデを行っている。3は頸部が屈曲してハの字状に開く壺の口縁部である。4は小型高杯の底部から脚部にかけての破片である。5~7は

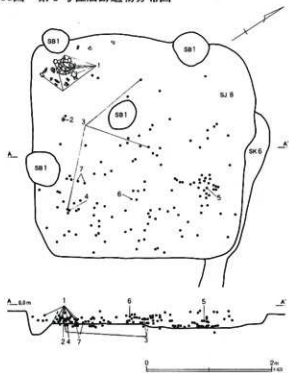
第97図 第8号住居跡出土遺物



第8号住居跡出土遺物観察表 (第97図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	台付甕	20.2			褐	赤褐	B	75	覆土下層
2	台付甕		9.4		褐	明赤褐	B	95	床面
3	壺	(12.6)			W	赤褐	B	25	覆土下層～P; 覆土上層
4	高環				B	にぶい黄橙	A	95	P; 覆土上層 円孔3ヶ所
5	高環				W	赤褐	A	50	覆土中層 円孔4ヶ所
6	高環		(20.6)		W	赤褐	A	15	覆土上層 円孔4ヶ所
7	高環		(9.0)		W	明赤褐	A	35	覆土下層

第98図 第8号住居跡遺物分布図



丁寧に磨きされた高環の脚部である。

この遺構の時期は、出土遺物から古墳時代前期であると推定される。

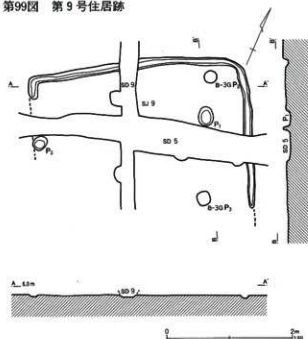
第9号住居跡 (第99図)

B-3グリッドに位置する。SD5、SD9と重複するが、新旧関係は不明である。方形プランの住居跡である。遺構の規模は、長辺3.4m、短辺は現存で2.3m、深さ9cmを測る。床面は平坦である。壁は確認面からの掘りこみが浅く、北隅部にわずかに遺存している。北側の壁溝によって住居の存在が確認されたもので、覆土はほとんど残らない。炉跡、支柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

出土遺物は、覆土から床面にかけて古墳時代前期の土師器小片が数片出土した。

この遺構の時期は、出土遺物より古墳時代前期であると推定される。

第99図 第9号住居跡

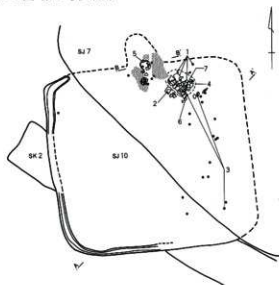


第10号住居跡 (第100・101図)

B-2グリッドに位置する。S J 7とSK 2を切って構築されており、この住居跡はS J 7とSK 2より新しい。北西-南東方向を主軸とする隅丸方形プランの住居跡であり、主軸方位はN-9°-Wを測る。

遺構の規模は、長辺2.7m、深さ17cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁溝は本来、全周していたものと思われる。カマドは北壁中央に位置し、カマドの両袖部が検出された。主柱穴は検出されなかったが、貯蔵穴はカ

第100図 第10号住居跡



マドと北東隅部との間に分布する遺物が、床面ラインよりかなり低いため、この部分に貯蔵穴があったものと思われる。住居跡の覆土は、焼土粒子と炭化物を含む暗灰褐色土である。

出土遺物は、カマド中央部から小振りの甕(第101図5)が伏せた状態で出土した。またカマドの右脇の床面上からも甕(第101図4)が見つれた状態で出土した。また同じ位置から、須恵器坏が3個体(第101図1-3)出土した。

この遺構の時期は、出土遺物から判断して平安時代であると考えられる。

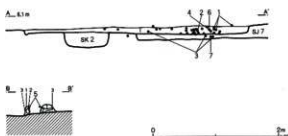
第1号掘立柱建物跡 (第102図)

B-1グリッドに位置する。S J 8を切って構築されており、この住居跡はS J 8より新しい。真北からやや西にずれた方位で長軸をとる。1間×3間の掘立柱となるが、西側は擾乱の範囲に及び、全容は明確ではない。

長辺約4.5m、短辺は現存で約1.4mを測る。柱穴は直径40-60cm、深さ約60cmである。近接するS J 10と主軸が一致しており、あるいは、関連する建物だった可能性がある。

出土遺物は古墳時代前期の土器片が少量出土した。

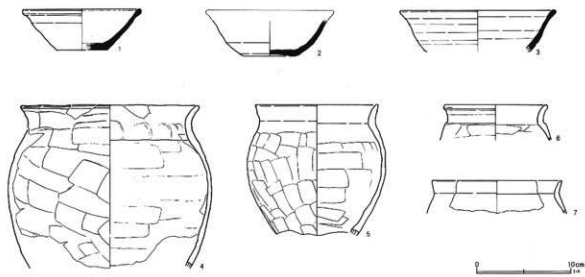
この遺構の時期は、S J 10との関連から平安時代と考えられる。



第10号住居跡 A-A'
1 暗灰褐色土 焼土粒子、炭化物を含む、黄灰褐色粒子を混入、粘性あり、しまり度。

カマド B-B'
1 赤褐色土 焼土粒子、ブロックを多量に含む、暗灰褐色土混入。
2 暗灰褐色土 焼土粒子、炭化物を含む、黄灰褐色粒子を少量混入。
3 暗灰褐色土 黄色味を帯びる、黄灰褐色粒子、小ブロックを多く混入。

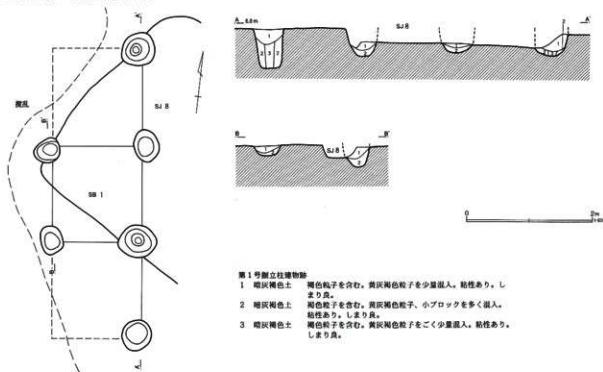
第101図 第10号住居跡出土遺物



第10号住居跡出土遺物観察表 (第101図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	須恵器坏	(12.6)	(4.3)	(5.4)	W	灰	B	25	覆上下層～床面 底部調整痕不明
2	須恵器坏			5.6	褐	灰白	B	70	床面 底部調整痕不明
3	須恵器坏	(16.6)			B	暗灰黄	B	40	床面
4	甕	(19.0)			BW	橙	A	70	床面
5	甕	13.2			B	にぶい黄澄	A	80	カマド中心部近位
6	甕	(11.1)			W雲	赤褐	A	25	
7	甕	(13.8)			W	橙	A	20	床面

第102図 第1号掘立柱建物跡



第1号掘立柱建物跡

- 1 暗灰褐色土
褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子を少量混入。粘性あり。しまり良。
- 2 暗灰褐色土
褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子、小ブロックを多く混入。粘性あり。しまり良。
- 3 暗灰褐色土
褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子をごく少量混入。粘性あり。しまり良。

3. 土壌

第1号土壌 (第103・107図)

B-2グリッドに位置する。S J 7に切られており、この土壌はS J 7より古い。SK 6を切って構築されており、この土壌はSK 6より新しい。SK 8と重複するが、新旧関係は不明である。南北にややカーブしながら不定型にのびる。先端部は角ばらず丸くとする。規模は、全長が現存で4.0m、幅1.0m、深さ20cmである。底面は横断面が船底状になる。覆土は暗灰褐色土である。出土遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が少量、底面から台付甕の脚部(第107図1)が出土した。この遺構の時期は、S J 7に切られることと出土遺物から、弥生時代後期から古墳時代前期と思われる。

第2号土壌 (第104図)

B-2グリッドに位置する。S J 6、S J 10、SK 3に切られており、本土壌はこれらの遺構より古い。平面形は長方形であり、南東隅が角ばらない。規模は、長辺7.1m、短辺0.8m、深さ32cmである。長辺を主軸とする方位はN-62°Wを測る。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。覆土は黒褐色土でSK 3に近似する。覆土中から赤彩された壺や環の小片が出土した。この遺構の時期は、SK 3に切られていることと出土遺物から、弥生時代後期であると思われる。

第3号土壌 (第104・107図)

B-2グリッドに位置する。SK 2を切って構築されており、この土壌はSK 2より新しい。東部が攪乱され、全体のプランは不明である。規模は、全長が現存で1.6m、幅1.4m、深さ18cmである。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。覆土はSK 2に近似した黒褐色土である。覆土中から、第107図2~4が出土した。2は頸部の括れが緩く、やや開いて口唇部にキザミがつく。内外面とも木口ナテ調整である。3は複合口縁壺の口縁部で、縄文が施文され、厚みのない棒状浮文、口縁下端にはキザミ目がつく。内面は赤彩される。4は壺の胴部で、鋸歯状の縄文区画文で無文部は赤彩される。この遺構の時期は、出土遺物から弥生

時代後期であると思われる。

第4号土壌 (第105・107図)

C-2グリッドに位置する。SD 4と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は幅約1.3mで、北西方向にゆるやかにカーブしながらのびて、SD 4に重複する。出土遺物の分布状況から、さらに北に向かっていたものと思われる。深さは22cmである。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。覆土は褐色粒子を含む暗灰褐色土である。出土遺物は覆土中から底面にかけて、特に南端部に集中して遺物(第107図5~10)が出土した。第107図5は無文の壺胴部で、丁寧に磨ききされる。6は壺の頸部から胴部にかけての破片で、頸部は緩やかに外反する。文様帯は括れ部下から胴部上半部に位置し、単節羽状縄文を4段配し、文様帯の上下両端を2本の結節文で区画する。7は小型壺で、口縁の形も整わず、内外面を指でなでつけただけの雑な作りである。9は口唇部と頸部下で連続キザミがめぐる特徴的な台付甕である。東京湾沿岸地域からの搬入品か、もしくはその影響下で作られたものであろう。10は手づくねによる小型高環で、内面に輪積み痕が顕著に残る。この遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期であると思われる。

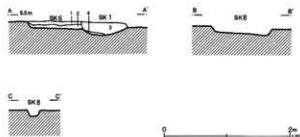
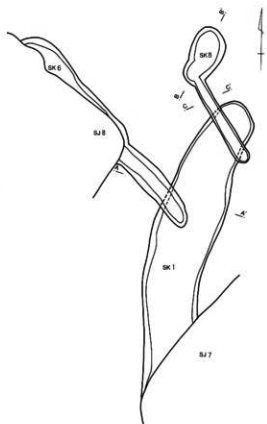
第5号土壌 (第106・107図)

B-2グリッドに位置する。SD 8に切られており、この土壌はSD 8より古い。S J 11と重複するが、新旧関係は不明である。北東-南西方向に主軸をとりまっすぐのびる。遺構の規模は長さか現存で約1.8m、幅約0.5m、深さ20cmを測る。主軸方位はN-36°Eを測る。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。覆土は暗灰褐色土である。出土遺物は覆土中から塔の破片(第107図11)が出土した。この遺構の時期は、出土遺物から古墳時代前期であると思われる。

第6号土壌 (第103図)

B・C-2グリッドに位置する。S J 1、SK 8に切られており、この土壌はS J 8、SK 1より古い。平面形は、北西-南東方向に主軸をとり、幅0.4~0.6

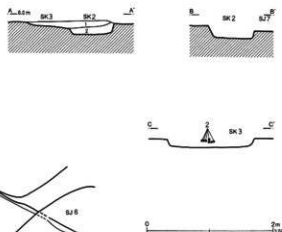
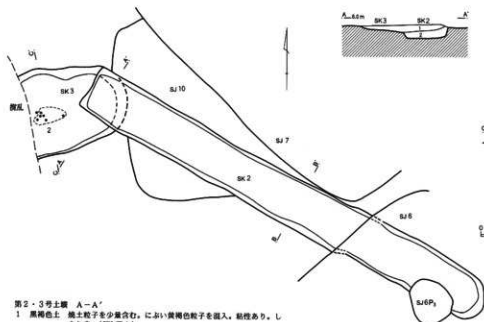
第103図 第1・6・8号土壌



第1・6号土壌 A-A'

- 1 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色土粒子、灰褐色土ブロックを混入。粘性あり。しまり良。(SK3 層土)
- 2 暗黄灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色土粒子、ブロックを多く混入。粘性あり。しまり良。(SK3 層土)
- 3 暗灰褐色土 1層より暗い。褐色粒子を含む。黄灰褐色土粒子をごく少量混入。粘性あり。しまり良。(SK1 層土)
- 4 暗灰褐色土 3層より暗い。褐色粒子を含む。黄灰褐色土粒子を多く混入。粘性あり。しまり良。(SK1 層土)

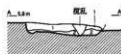
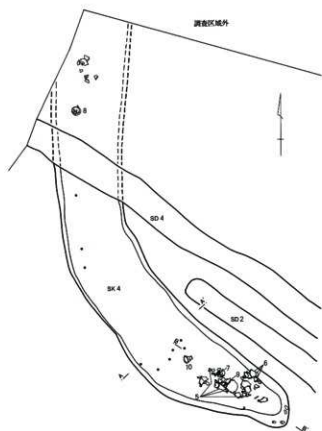
第104図 第2・3号土壌



第2・3号土壌 A-A'

- 1 黒褐色土 黒土粒子を少量含む。におい黄褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。(SK3 層土)
- 2 黒褐色土 1層より暗く。灰色味をおびる。ごく少量のにおい黄褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。(SK2 層土)

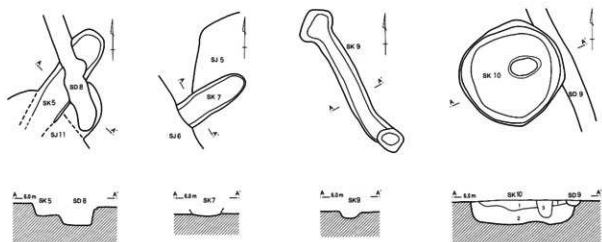
第105図 第4号土壤



第4号土壤

- 1 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子、灰褐色ブロックを多量混入。粘性あり。しまり良。
- 2 暗黄灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子、ブロックを多く混入。粘性あり。しまり良。

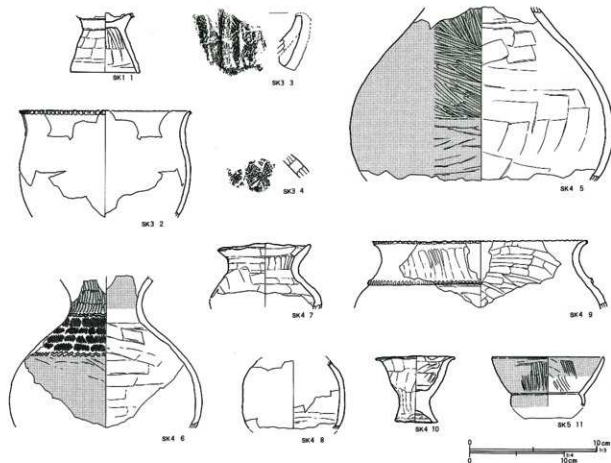
第106図 第5・7・9・10号土壤



第10号土壤

- 1 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。黄土粒子を少量含む。黄灰褐色粒子を少量混入。粘性あり。しまり良。
- 2 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子、ブロックを混状に混入。粘性あり。しまり良。
- 3 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子をごく少量混入。粘性あり。しまり良。

第107図 土壇出土遺物



土壇出土遺物観察表 (第107図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	台付甕	(18.4)		7.4	W	赤褐	B	95	SK1 底面内面コゲツキ付着
2	台付甕				W褐	灰黄褐	A	20	SK3 器面剝離著しい
3	壺				褐	赤褐	B		SK3 口縁部 内面赤彩
4	壺				W褐	明赤褐	B	SK3 胴部 無文部赤彩	
5	壺				W	暗赤褐	A	60 SK4	
6	壺				褐	黄褐色	B	25 SK4	
7	小型壺	10.0			W褐	褐	A	90 SK4	
8	壺				褐	黄褐	B	70 SK4	
9	台付甕	(23.0)			W褐	黄褐	A	10 SK4	
10	小型高坏	8.5	7.0	4.5	W	褐	B	90 SK4	
11	埴	(12.0)			W	橙	A	10 SK5	

mで棒状にのびる。長さ3.9m、深さ19cmである。主軸方位はN-41°-Wを測る。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。覆土は暗灰褐色土である。SK1とSJ8に切られることからこの遺構の時期は、弥生時代後期～古墳時代前期より以前に構築されたものであると考えられる。

第7号土壇 (第106図)

A-3グリッドに位置する。SJ5、SJ6と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は北東-南西方向に主軸をとり、幅0.4m、長さ約1.2mでまっすぐのびる。深さは約6cmを測る。主軸方位はN-57°-Eを測る。底面はほぼ平坦である。出土遺物はなく性格、時期ともに不明である。

第8号土墳 (第103図)

B・C-2グリッドに位置する。SK1と重複するが、新田関係は不明である。規模は長径約0.9m、短径約0.5mの不定形な土壌に幅約20cmの細長い溝状遺構が付属する。出土遺物はなく性格、時期ともに不明である。

第9号土墳 (第106図)

C-2グリッドに位置する。平面形は北西-南東方向に主軸をとり、やや蛇行しながら細長くのびる。両端にピットを伴う。横断面はU字形である。規模は、長さ2.6m、幅0.3m、深さ16cmである。主軸方位はN

4. 溝・ピット

第1号溝 (第108・109図)

B-4グリッドに位置する。SJ1を切って構築されており、この溝は、SJ1より新しい。北に向かって地山が傾斜はじめる部分に沿って、ゆるやかにカーブしながら東西方向に伸びる。全長5.7m、幅0.6m、深さ15cmを測る。溝の断面は皿状になり、底面はやや平坦になる。覆土は灰褐色土である。出土遺物は覆土から、古墳時代前期の土器片が出土した。この遺構の時期は不明である。

第2号溝 (第108・109図)

SJ2、SJ3を切って構築されており、この溝は、SJ2、SJ3より新しい。SD5、SD7、SD8と重複するが、新田関係は不明である。調査区中央部を北西-南東方向におよぼすく伸び、その伸びる方向は、調査区内のコンタラインに概ね一致する。SJ3との重複部分では、溝が2本になる部分も見られ、何度か掘り直された形跡と見られる。規模は全長26m、幅1m、深さ26cmを測る。溝の断面はU字形で、底部はやや平坦になる部分もある。覆土は明灰褐色土である。出土遺物は古墳時代前期の土器が少量出土した。この遺構の時期は不明である。

第3号溝 (第108・109図)

B-5グリッドに位置する。SD7と重複するが、新田関係は不明である。真北からやや西にふれる方向

-30°-Wを測る。出土遺物はなく性格、時期ともに不明である。

第10号土墳 (第106図)

B-2・3グリッドに位置する。SD9に切られており、この土墳はSD9より古い。平面形は円形プランであり、底面はやや中央よりが島状にもり上がる。壁は垂直に近く立ち上がる。規模は、直径約1.6m、深さ0.4mを測る。覆土は暗褐色土である。出土遺物は古墳時代前期の土器小片が出土した。この遺構は時期、性格ともに不明である。

に直線的に伸び、南部の調査区壁際で、SD7に垂直に交わり、さらに南側に伸びる様相である。規模は全長4.3m、幅0.7m、深さ44cmを測る。溝の断面は一部逆台形となり、北側ではV字形に近い形状をとる。覆土は上層は明灰褐色土、下層は暗灰褐色土である。出土遺物は土器小片が数片出土した。この遺構の時期は不明であるがSD7との位置的関係から見ると、同時期の関連する遺構であった可能性がある。

第4号溝 (第108・109図)

B-3・4グリッドからC-2・3グリッドにかけて位置する。SK4と重複するが、新田関係は不明である。地山の傾斜にそって、ほぼ直線的に伸びる。規模は全長24.6m、幅0.9m、深さ24cmを測る。溝の断面は皿状になり底面に平坦な面をもつ。覆土は暗灰褐色土である。出土遺物は古墳時代前期の土器片が少量出土した。この遺構の時期は不明である。

第5号溝 (第108・109図)

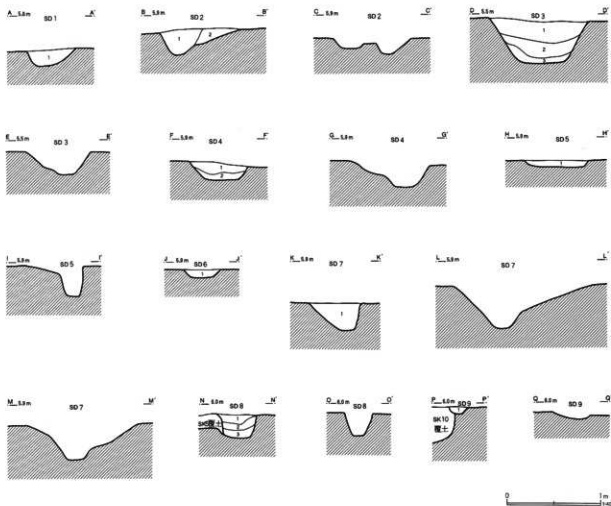
B-3グリッドに位置する。SJ3を切って構築されており、この溝は、SJ3より新しい。SJ9、SD2、SD9と重複するが、新田関係は不明である。南側にややカーブしながら東西方向に伸びる。規模は全長11.3m、幅0.7m、深さ36cmを測る。溝の断面は浅い皿状で、底面はほぼ平坦である。覆土は暗灰褐色土である。出土遺物はなく、時期も不明である。

第108図 溝・ピット





第109図 溝土層



第1号溝 A-A'

1 灰褐色土 黄灰褐色粒子、暗灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。

第2号溝 B-B'

1 明灰褐色土 ごく少量の暗灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。
2 暗灰褐色土 褐色粒子を少量含む。黄灰褐色粒子、明灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。

第3号溝 D-D'

1 明灰褐色土 黄灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。
2 暗灰褐色土 褐色粒子を少量含む。黄灰褐色粒子、明灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。
3 暗黄灰褐色土 黄灰褐色粒子を多く混入。粘性あり。しまり良。

第4号溝 F-F'

1 暗灰褐色土 褐色粒子を少量含む。黄灰褐色粒子、ブロックを混入。粘性あり。しまり良。
2 暗黄灰褐色土 黄灰褐色粒子、ブロックを多く混入。粘性あり。しまり良。

第5号溝 H-H'

1 暗灰褐色土 黄灰褐色粒子、明灰褐色小ブロックを混入。粘性あり。しまり良。

第6号溝 J-J'

1 黒灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子をごく少量混入。(下層は多い)粘性あり。しまり良。

第7号溝 K-K'

1 明灰褐色土 黄灰褐色粒子を混入。粘性あり。しまり良。

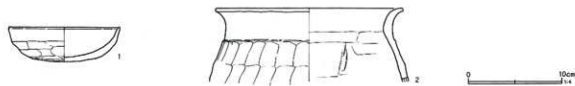
第8号溝 N-N'

1 黒灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子、明灰褐色小ブロックを少量混入。粘性あり。しまり良。
2 暗灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子、ブロックを混入。粘性あり。しまり良。
3 暗黄灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子、小ブロックを多く混入。粘性あり。しまり良。

第9号溝 P-P'

1 明灰褐色土 褐色粒子を含む。黄灰褐色粒子を少量混入。粘性あり。しまり良。

第110図 溝出土遺物



溝出土遺物観察表 (第110図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考	
1	環	12.0	3.7		B	浅黄 橙	A	45	SD 7	
2	甕	(20.0)			W	橙	A	5	SD 7	

第6号溝 (第108・109図)

A-3グリッドからB-3グリッドにかけて位置する。S J 3、SD 7と重複するが、新旧関係は不明である。北西方向に向かってまっすぐ伸びるが、SD 7と交わる部分で、やや東よりにカーブする。規模は全長3.5m、幅0.4m、深さ9cmを測る。溝の断面は皿状である。覆土は黒灰褐色土である。出土遺物はなく、時期も不明である。

第7号溝 (第108～110図)

S J 4を切って構築されており、この溝は、S J 4より新しい。SD 2に切られており、この溝は、SD 2より古い。S J 2、S J 5、S J 6、SD 3、SD 6と重複するが、新旧関係は不明である。調査区南側の壁にそって直線的に伸び、SD 3と交わって終わる。西に向かってはまだ伸びる様相である。

規模は全長33.4m、幅1.2m、深さ44cmを測る。溝の断面は溝幅の狭い部分でV字形、他の部分では葉研掘りに近い形状である。覆土は明灰褐色土である。

出土遺物は古墳時代前期の土器片の他に、須恵器小

片、土師器環 (第110図1)、長胴甕の一部 (2) が出土した。この遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期以降であると思われる。

第8号溝 (第108・109図)

B-2グリッドからC-2グリッドにかけて位置する。S J 7、SK 5を切って構築されており、この溝は、S J 7、SK 5より新しい。SD 2と重複するが、新旧関係は不明である。真北からやや西にずれた方向で伸び、SD 2に交わる。規模は全長10.7m、幅0.4m、深さ26cmを測る。溝の断面はU字形である。出土遺物は古墳時代前期の土器が数片出土した。この遺構の時期は不明である。

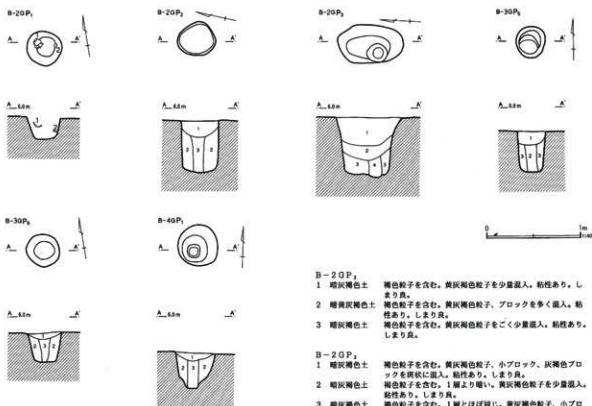
第9号溝 (第108・109図)

B-2グリッドからB-3グリッドにかけて位置する。SK 10を切って構築されており、この溝は、SK 10より新しい。SD 5と重複するが、新旧関係は不明である。北西-南東方向に伸びる細長い溝である。規模は全長9.0m、幅0.5m、深さ9cmを測る。溝の断面は浅い皿状である。出土遺物はなく、時期も不明。

溝観察表

遺構名	全長	幅	深さ	覆土	出土遺物	時期・備考
SD 1	5.7m	0.6m	15cm	灰褐色土	土師器環 長胴甕	古墳時代後期以降
SD 2	26.0	1.0	26	明灰褐色土		
SD 3	4.3	0.7	44	暗灰褐色土		
SD 4	24.6	0.9	24	暗灰褐色土		
SD 5	11.3	0.7	36	暗灰褐色土		
SD 6	3.5	0.4	9	黒灰褐色土		
SD 7	33.4	1.2	44	明灰褐色土		
SD 8	10.7	0.4	26			
SD 9	9.0	0.5	9			

第111図 ビット



- B-4 GP₁
- 1 暗灰褐色土 黄灰褐色粒子、暗灰褐色粒子を少量混入。粘性あり、しまり良。
 - 2 暗灰褐色土 1層よりやや細かい、黄灰褐色粒子、ブロックを塊状に混入する。粘性あり、しまり良。
 - 3 暗灰褐色土 1層よりかなり細かい、黄灰褐色粒子をごく少量混入する。粘性あり、しまり良。

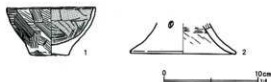
- B-2 GP₁
- 1 暗灰褐色土 褐色粒子を含む、黄灰褐色粒子を少量混入。粘性あり、しまり良。
 - 2 暗黄灰褐色土 褐色粒子を含む、黄灰褐色粒子、ブロックを多く混入。粘性あり、しまり良。
 - 3 暗灰褐色土 褐色粒子を含む、黄灰褐色粒子をごく少量混入。粘性あり、しまり良。

- B-2 GP₂
- 1 暗灰褐色土 褐色粒子を含む、黄灰褐色粒子、小ブロック、灰褐色ブロックを塊状に混入。粘性あり、しまり良。
 - 2 暗灰褐色土 褐色粒子を含む、1層より細かい、黄灰褐色粒子を少量混入。粘性あり、しまり良。
 - 3 暗灰褐色土 褐色粒子を含む、1層とはほぼ同じ、黄灰褐色粒子、小ブロックを混入。粘性あり、しまり良。
 - 4 暗灰褐色土 褐色粒子を含む、2層とはほぼ同じ、黄灰褐色粒子をごく少量混入。粘性あり、しまり良。

- B-3 GP₁・B-3 GP₂
- 1 暗灰褐色土 褐色粒子を含む、黄灰褐色粒子、暗灰褐色粒子を少量混入。粘性あり、しまり良。
 - 2 暗灰褐色土 1層より細かい、褐色粒子を少量含む。黄灰褐色粒子をごく少量混入。粘性あり、しまり良。
 - 3 暗黄灰褐色土 黄灰褐色粒子を多く混入。粘性あり、しまり良。

ビット (第108・111~113図)

単独のビットは全部で29基検出された。B-2、3グリッド内およびB-4グリッド内のS J 1周辺に分布している。B-2 GP₁が出土遺物から古墳時代前期である以外は、出土遺物もなく、時期は不明である。遺構の形状は、円形のものが多い、楕円形のもの



ビット出土遺物観察表 (第112図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	小型環	9.6	5.1	4.1	B雲	橙	B	95	B-2 GP ₁
2	高環			(11.4)	W雲	褐	A	25	B-2 GP ₁

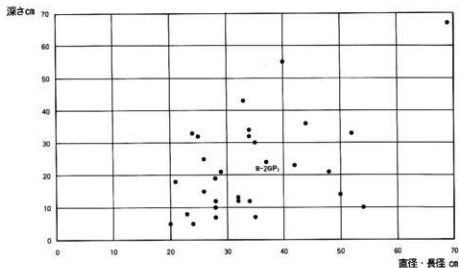
もある。規模は、直径または長径が20~30cm代のものが多い。覆土の多くは灰褐色土~暗灰褐色土であり、住居跡の覆土に近いことから、時期的には古墳時代前期から平安時代の間に収まるものと考えられる。土層断面で柱痕を確認できたものもあり、あるいは掘立柱建物跡か住居跡の痕跡だった可能性もある。

B-2 GP₁の覆土からは、第112図1、2が出土した。1は小型環である。外面は下から斜め上に向かってハケメ、内面は木口ナデを密におこない、内面のみ赤彩される。ほぼ完形に近い形で出土した。2は、高環脚部の破片である。

ビット観察表

遺構名	平面形	直径・長径	深さ	覆土	出土遺物	時期・備考
A-3GP ₁	円形	21cm	18cm			
B-2GP ₁	円形	37	24	暗灰褐色土	小型環 高環脚部	古墳時代前期
B-2GP ₂	円形	40	55	暗灰褐色土		
B-2GP ₃	楕円形	69	67	暗灰褐色土		
B-2GP ₄	楕円形	50	14	暗灰褐色土		
B-2GP ₅	円形	34	34	暗灰褐色土		旧B-3GP ₁
B-3GP ₁	円形	25	32	灰褐色土		
B-3GP ₂	円形	20	5	灰褐色土		
B-3GP ₃	円形	24	5	暗灰褐色土		
B-3GP ₄	楕円形	52	33	暗灰褐色土		
B-3GP ₅	円形	33	43	暗灰褐色土		
B-3GP ₆	円形	28	7	灰褐色土		
B-3GP ₇	円形	24	33	暗灰褐色土		
B-3GP ₈	円形	29	21	灰褐色土		
B-3GP ₉	円形	35	30	暗灰褐色土		旧B-3GP ₁₀
B-4GP ₁	円形	44	36	暗灰褐色土		
B-4GP ₂	円形	34	32	暗灰褐色土		
B-4GP ₃	楕円形	35	7	暗灰褐色土		
B-4GP ₄	円形	32	13			
B-4GP ₅	楕円形	42	23	明灰褐色土		
B-4GP ₆	円形	34	12	暗灰褐色土		
B-4GP ₇	円形	26	15	暗灰褐色土		
B-4GP ₈	楕円形	54	10	暗灰褐色土		
B-4GP ₉	円形	28	19	明灰褐色土		
C-1GP ₁	円形	23	8			
C-1GP ₂	円形	28	10			
C-1GP ₃	円形	26	25			
C-1GP ₄	円形	32	12			
C-1GP ₅	円形	28	12			
C-2GP ₁	円形	48	21			

第113図 ビット計量グラフ



V 大久保条里遺跡

1. 遺跡の概要

大久保条里遺跡は、荒川低地内の自然堤防に囲まれた後背湿地に立地する。遺跡の範囲は約210haという広範囲に及ぶ。標高は5.5mを測り、東側を囲む自然堤防より2～3m低くなる。

今回の調査区は遺跡範囲内の南部に位置し、現在の荒川堤防に沿って全長570m、幅30～35mの帯状に設定された部分である。

基本土層は第115図に示す通りである。調査区には厚さ1.5mにおよぶ川砂の客土が覆っていた。この客土は大正時代に盛土されたものといわれており、この下から基本土層が始まる。A・B区の第1・2層は表土層である。第4層は部分的に薄く堆積する層で、土師器片や平安時代の須恵器片がこの層から出土することから、平安時代の遺物包含層であると考えられる。今回の調査で検出された溝と土壌の多くは、覆土がこの第4層に近似する。遺構検出面は第5層上面である。遺構の多くが第4層から掘り込まれ、第5層から第6層を切って構築されていた。C～F区の基本土層では、第I層がA・B区の基本土層の第1・2層に、第II層が同じく第3層に、第III層が同じく第4層に、第IV層が同じく第5・6層に対応する。また、第V層が同じく第7～9層に対応する。第VI層黒色泥炭層はA・B区では明確ではないが、前後の層順から第10・11層に対応するものと考えられる。E・F区では第VI層から縄文中期の土器片（第141図5・6）が出土した。

古環境研究所のテフラ分析によれば、A区の基本土層第3層中位から、1783（天明3）年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（Ar-A）が検出された。B区では、1707（宝永4）年に富士火山から噴出した富士宝永スコリア（F-Ho）の降灰層が第3層下位に、浅間A軽石（Ar-A）の降灰層が第2層上位にある可能性が考えられている。よって、第3層は浅は18世紀後半以降の堆積層である可能性が考えられる。放射性炭素同位体年代測定によれば、F区の第VI層黒色泥炭層に約

4500年前という年代が与えられている。

以上、遺物の出土状況と自然科学分析の結果をまとめてみると、概ね次のように考えられる。すなわち、C～F区の基本土層第VI層（A・B区の第10・11層に相当）は縄文時代中期から後期、第III層（A・B区の第4層に相当）は平安時代以降、第II層（A・B区の第3層に相当）は浅は近世以降の堆積層であると考えられる。

今回の調査の結果、検出された遺構は、溝122条、畦畔11条、土壇30基、竪穴状遺構1基、盛土状遺構1基である。

溝は6条を除いた全てのもので、東西または南北の方位にとってまっすぐに伸びる。A区とC区北半部からF区にかけてのエリアでは、溝は南北方向に伸びるのに対し、B区からC区南半部にかけてのエリアでは、溝は東西方向に伸びている。A・C・E・F区北部では、東西と南北の溝が直角に接続して長方形の区画溝を形成する。溝は2～4条が近接し、まとまりをもって伸びるが、重複して伸びるものも多く、その中には新旧関係が捉えられるものもある。これらの溝のまとまりとまとまりの間には9～12mの間隔をもって遺構の空白域ができており、この空白域が溝によって長方形に区画された部分になるものと考えられる。さらに調査区全体で見ると、東西に伸びるSD6、SD42、SD87、SD104～106を境にして5つに大きく区割りされており、その中をさらに細長く東西または南北方向の区割りを構成しているものと考えられる。

以上の特徴から、これらの溝は、ある一定の時間幅の中で規則性をもって構築された、ひとつの遺構群として捉えることができる。溝の多くは、A・B区基本土層の第4層から掘り込まれて構築されている。覆土は黒褐色土または黒色土で、A・B区基本土層の第4層に近似する。大半の溝からは遺物が出土しなかった。遺物が出土した溝では、土師器片や平安時代の須恵器

片がわずかに出土した他、SD55では覆土中から常滑焼の甕破片(第133図2)が出土した。

畦畔は11条検出された。第1～10畦畔は、A区からC区にかけて分布しており、東西または南北方向にまっすぐに伸びる。A区の第1号畦畔、B区の第2・3号畦畔、C区の第7・8・10号畦畔は、溝に近接して沿うように伸びるのに対して、B区の第4号畦畔、C区の第5・6号畦畔は溝と溝との中間に位置して伸びる。これらの畦畔は位置関係から溝との関連性が考えられる。同時に、B区の第3畦畔、C区の第7・9号畦畔は、溝と重複したり重複によって途切れたりしており、これらの畦畔は溝との間に時間的前後関係があることも窺がわせる。F区の第11号畦畔は、南北方向からやや振れた方位をとってまっすぐに伸びて、北部で直角に折れ曲がる。畦畔の多くは、横断面形が台形で上部が平坦になり、A・B区基本土層の第5層上面から盛土をして構築される。A区の第1号畦畔では、灰色土と黒褐色土とが互層をなして表土層の高さまで盛土されていることが観察される。畦畔の幅は、最も広いものが第3号畦畔で上部幅9.5m、下部幅11mを測るが、ほとんどのものが、下部幅3～5m台である。盛土の高さは高いもので第2号畦畔の68cm、第1号畦畔の51cm、第3号畦畔の43cmと続くが、その他のものは10～20cm台に収まる。

土壌は29基検出された。C区で4基、F区で25基検出されており、F区の調査区中央部から北部にかけて比較的多く分布する。ほとんどの土壌の平面形が方形または長方形で、底面は平坦になるものが多く、形態的には共通するものが多い。長辺を主軸とする方位は、東西または南北を指して溝に共鳴するように見えるが、それ以外の土壌も存在する。また溝と重複するものもあり、土壌と溝との間に時間的前後関係があることも窺がわせる。

土壌の多くは第4層から掘り込んで構築されており、覆土は黒色土または黒褐色土である。土壌の規模は、長辺・短辺が2mを超えるものは少なく、1m台が多い。深さは10cm台を測る浅いものが多い、20cm

を超えるものは少ない。出土遺物はほとんどないが、SK8では覆土中から古銭(第139図1)が出土した。この古銭は太平通寶で、976年に中国の北宋で鋳造されたものといわれる。SK8がSD97を切って構築される事実とも合わせて、SK8と規模や形態が共通する他の土壌群と溝の時期を考えるうえで重要である。

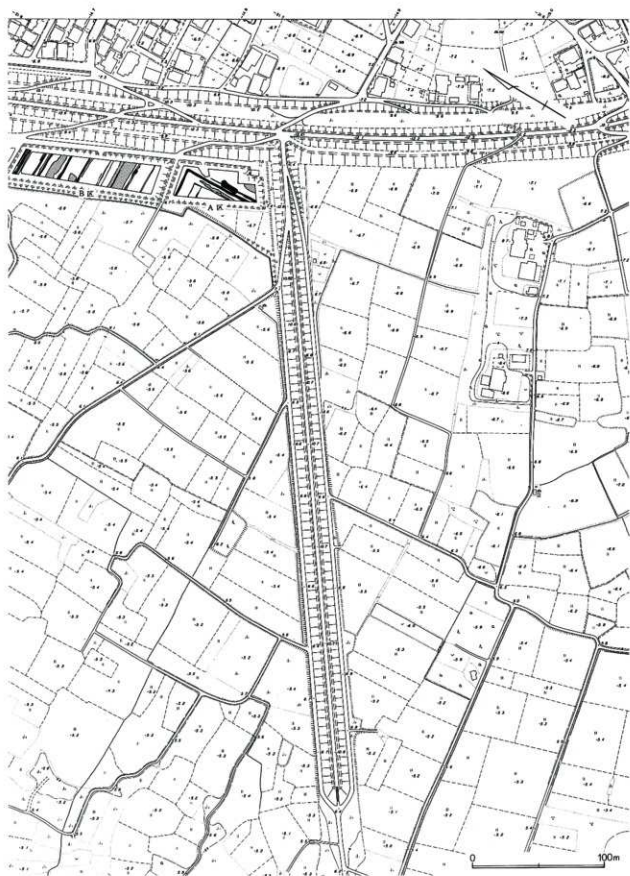
この他、A区では堅穴状遺構が1基、盛土状遺構が1基検出された。第1号堅穴状遺構は長辺13m、短辺3.5m、深さ50cmを測る大規模な遺構であるが、遺構の性格は不明である。出土遺物に黒色釉の灰底部、常滑焼の甕破片があり、中世の遺構と考えられる。重要なのはこの遺構がSD1を切って構築されていることで、東西南北に方位をとって伸びる溝群の時期を考える資料を提供した。第1号盛土状遺構は調査区の隅部で検出されたため全容は不明であるが、B区の第3号畦畔のように幅広い畦畔だった可能性もある。

今回の調査で検出された遺構は、出土遺物のないものが大半で、遺物が出土しても小破片であり、数量的にもわずかである。少ない出土遺物だけに頼って遺構の時期を考えるうえでは根拠が弱いということが前提になる。今回検出された溝と畦畔については、条里制に関連する遺構群である否かが最大の焦点となる。遺構の構築時期に関しては、土壌採取による自然科学分析の結果も踏まえ、出土遺物はもちろん、遺構の切り合い関係、層位的関係などの考古学的事実にも照らしながら慎重に検討されなければならない。

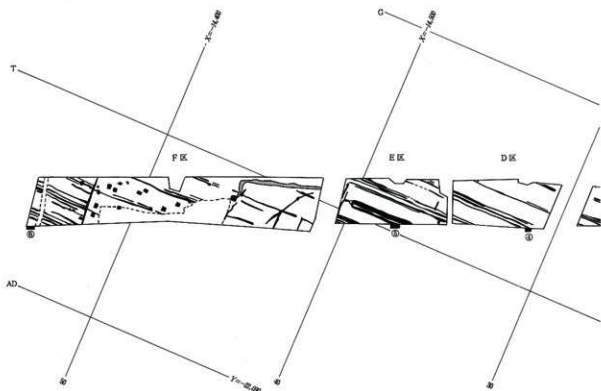
今回の調査では縄文土器片が18点出土した。A・B区では、遺構の覆土中や遺構外の遺構検出面、基本土層第4層の土層断面から出土しており、E・F区では基本土層第VI層黒色泥炭層の土層断面から出土した。いずれも小破片で量も少ないため、河川の洪水による流れ込みの結果である可能性も否定できないが、今後、第VI層黒色泥炭層の面で縄文時代の遺構が検出される可能性も残されている。

第114図 調査範囲と周辺の地形

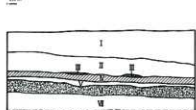




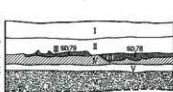
第115図 大久保条里遺跡全体図・基本土層



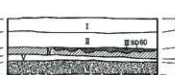
① F区



② E区



③ D区



F区

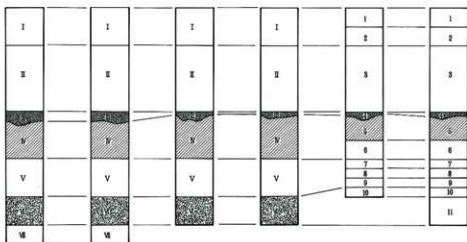
E区

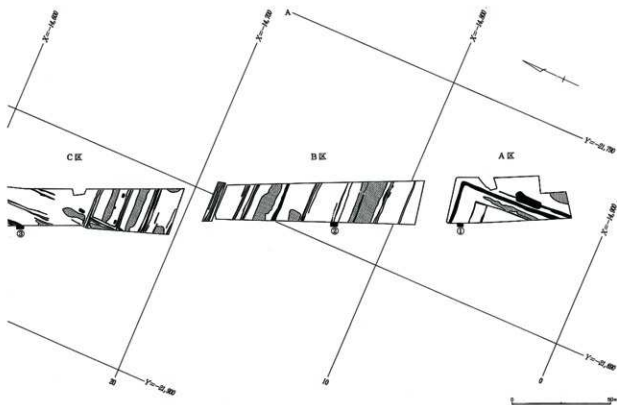
D区

C区

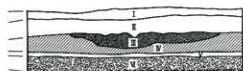
B区

A区

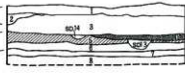




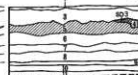
③ C区



② B区



① A区



5.5m

0 2m

A・B区基本土層

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 粘質土を混入。2層との境付近は鉄分を含み褐色味をおびる。粘性なし。しまり強。
- 2 灰色土(7.5Y4/1) 粘土と砂の比率は地点により異なる。部分的に植物遺体を含む。粘性強。しまり強。
- 3 灰色土(5Y4/1) 炭化粒子を含む。粘性が非常に強い。鉄分を少量含む。粘性が非常に強い。しまり強。
- 4 黒色土(7.5YR2/1) 鉄分を多く含む。粘性中。しまり強。
- 5 灰色土(5YR/1) 鉄分を少量含む。炭化物層(厚さ1~2mm)と、明るい灰色土層(厚さ1~5mm)が縦状に認められる。灰色粘質土がブロック状に入る。粘性、しまり強。
- 6 暗緑灰色土(10GY4/1) 鉄分を少量含む。シルト層。下半は粘性が強い。粘性中。しまり中。
- 7 緑灰色土(10GY5/1) 6層より明るい。6層との境に灰色土層と炭化物層がある。鉄分を含む。粘性強。しまり中。
- 8 灰色土(7.5Y4/1) 灰色粘質土と暗緑灰(5Y4/1)色シルト層が交互に入る。灰色粘質土が主体。炭化物層(植物遺体)が所々に入る。粘性中。しまり中。
- 9 灰色土(5Y4/1) 上下に炭化物層(植物遺体)がある。部分的にも炭化物層とやや明るい灰色土層がある。粘性非常に強。しまり強。

10 灰色土(7.5Y4/1)

9層より明るい。層下に数層のうすい炭化物の層(植物遺体)と灰色粘土の互層がある。粘性強。しまり中。
炭化粒子(植物遺体)を含む。灰色粘質土のうすい層を層中に混入する。

11 暗緑灰色粘土(8Y/1)

炭化粒子(植物遺体)を含む。灰色粘質土のうすい層を層中に混入する。

C~F区基本土層

I 表土層

II 暗灰色シルト(10YR4/1)

白色小礫石を含む。黒色粘土、褐色粘土を混入する。

III 褐色シルト(7.5YR1.7/1)

褐色シルトがブロック状にまたは縦帯状、マープル状に混入する。しまりなし。

IV 灰色シルト(10YR/1)

濃の黄土に近似する土層が、主に横軸状に混入する。粘土の混入は認められない。

V オリーブ黒色土(5Y2/2)

灰色土層と泥炭層との互層。酸化鉄に凝固する褐色粘土を含む。

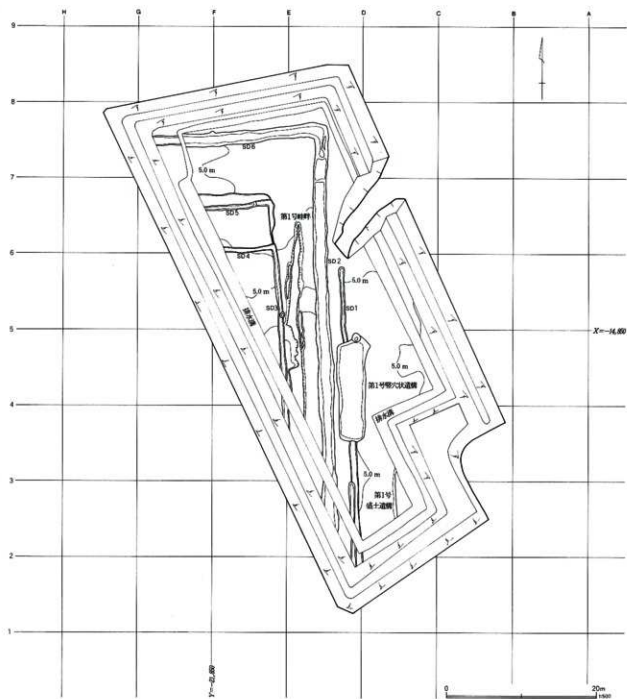
VI 黒色泥炭(10YR1.7/1)

植物遺体。マコを混入。

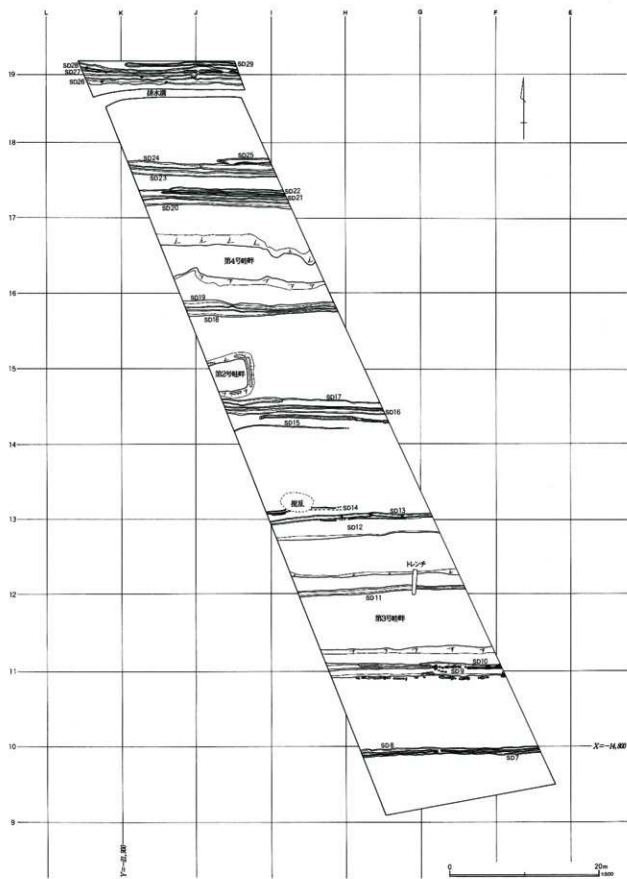
VII 暗灰色シルト(7.5YR/1)

軟質の植物主体。水柱のアッシュの主要部を多く含む。粘土の混入は認められない。

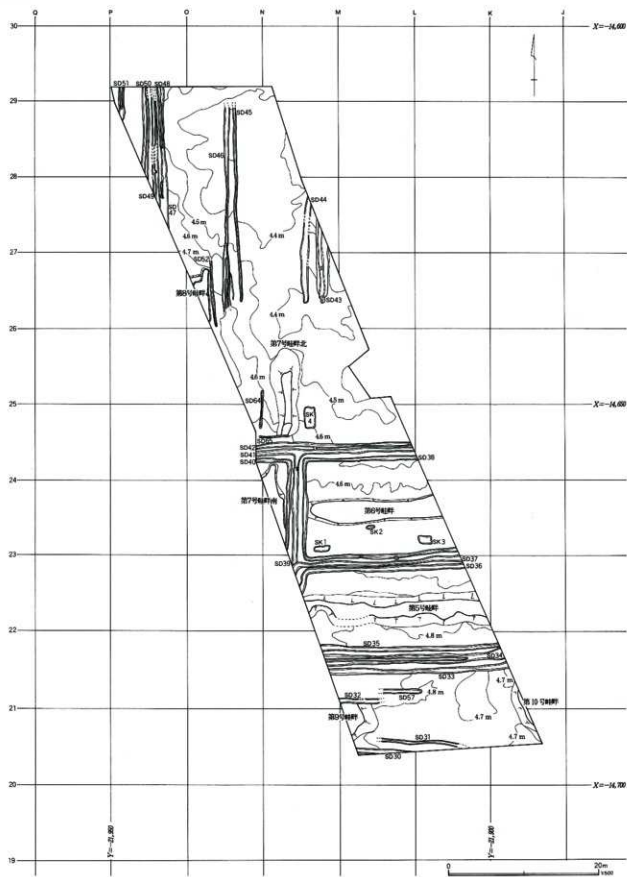
第116图 A区全体图



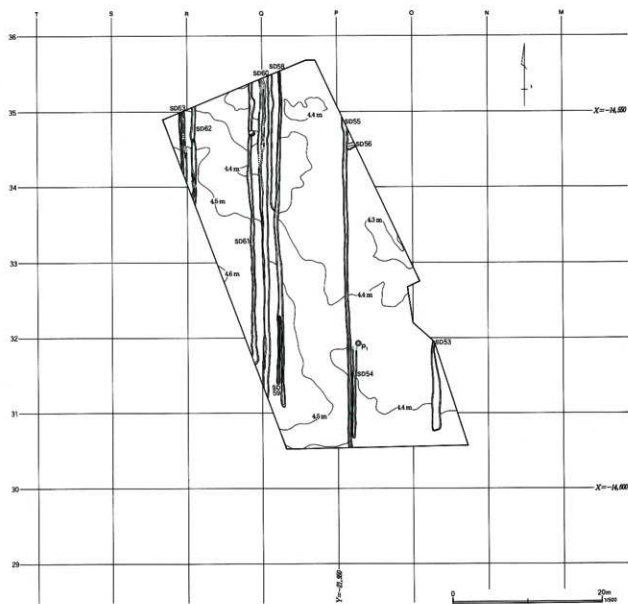
第117图 B区全体图



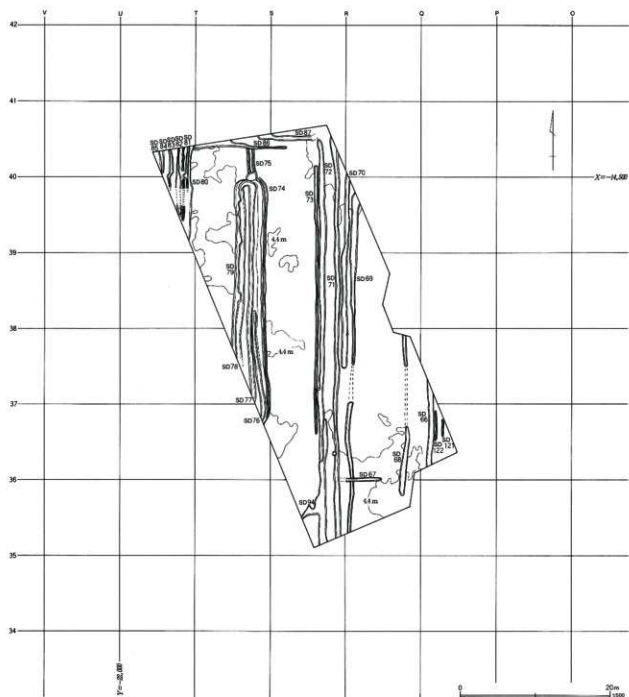
第118图 C区全体图



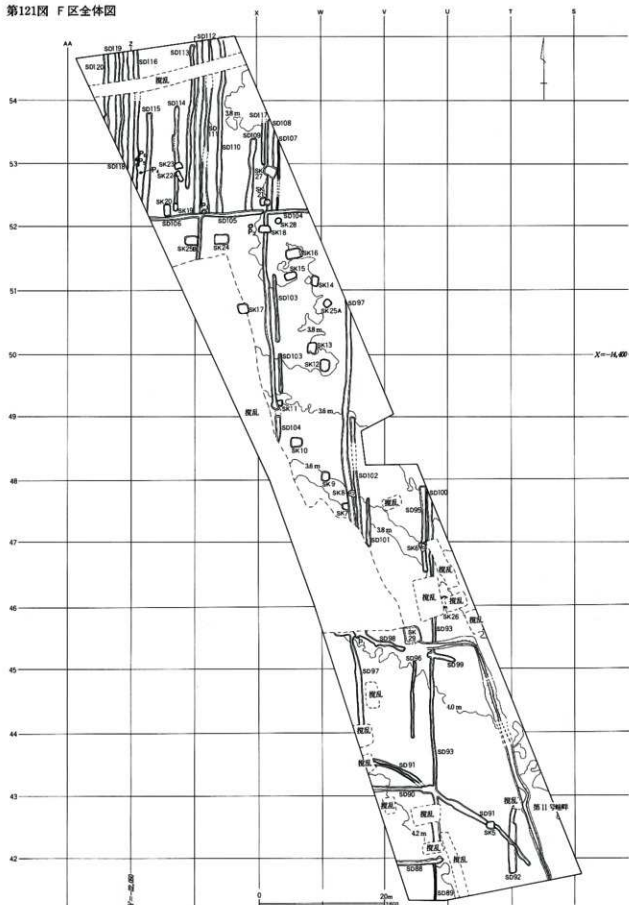
第119图 D区全体图



第120图 E区全体图



第121图 F区全体图



2. 遺構と遺物

(1) A区 (第122～124区)

溝6条、畦畔1条、竪穴状遺構1基、盛土状遺構1基が検出された。溝は並行して鋸形に走り、畦畔とも並行する。

第1号溝

A区中央部を南北方向にまっすぐに伸びる。SD2、SD3、第1号畦畔と並行する。南部で掘り直しと考えられる重複した溝が伴う。第1号竪穴状遺構に切られる。溝の幅は1.6m、深さは26cmを測る。基本土層の観察では第IV層から掘り込まれる。

第2号溝

A区中央部を南北方向にまっすぐに伸び、調査区北部でSD6に直角に接続する。SD1、SD3、第1号畦畔と並行する。溝の幅は2.1m、深さは47cmを測る。覆土は上層が黒褐色土、下層が褐灰色土である。覆土中から須恵器の小破片が出土した。

第3号溝

F-5・6グリッドに位置する。第1号畦畔の西側に沿って南北方向にまっすぐに伸び、SD4にはほぼ直角に接続する。溝の幅は0.8m、深さは34cmを測る。覆土は褐灰色土である。遺物は出土しなかった。

第4号溝

F-6・7グリッドに位置する。東西方向にまっすぐに伸び、SD3にはほぼ直角に接続する。SD5、SD6と並行する。溝の幅は0.6m、深さは16cmを測る。覆土はSD3と同一の褐灰色土である。遺物は出土しなかった。

第5号溝

G-7、F-7グリッドに位置する。東西方向にまっすぐに伸び、途中で直角に折れ曲がり、細くなりながらSD3に接続する。SD4、SD6と並行する。溝の幅は東西方向に伸びる部分で2.1m、深さは14cmを測る。覆土はSD3、SD4と同一の褐灰色土である。出土遺物は須恵器の破片が1片である。SD3・4・5は接続する位置関係と同一の覆土であることから、関連する同時期の溝であると考えられる。

第6号溝

A区の調査区北部に位置する。東西方向にまっすぐに伸び、SD2に直角に接続する。SD4、SD5と並行する。溝の幅は2m、深さは18cmを測る。覆土は上層が黒褐色土、下層が褐灰色土である。覆土中から回転糸切り痕のある須恵器環の底部破片(第124図1)が出土した。SD2とSD6は直角に接続すること、覆土が近似することから関連する同時期の溝であると考えられる。

第1号畦畔

調査区中央部に位置し、SD3の東側に沿うように南北方向に伸びるが、途中で東にやや振れて伸びる。伸びる方向は、SD1、SD2、SD3にはほぼ並行する。全長25.0m、幅2.7m、高さ51cmを測る。畦畔の横断面は台形を呈する。基本土層からの観察では、本遺構は第5層の上面から盛土されており、灰色土と黒褐色土とが互層をなしながら第1層の高さまで堆積しており、数次にわたって土を盛り上げていることがわかる。このことは、本遺構が第5層上面に構築された時代からごく最近の時期まで、畦畔として存在していた可能性を示唆している。

第1号竪穴状遺構

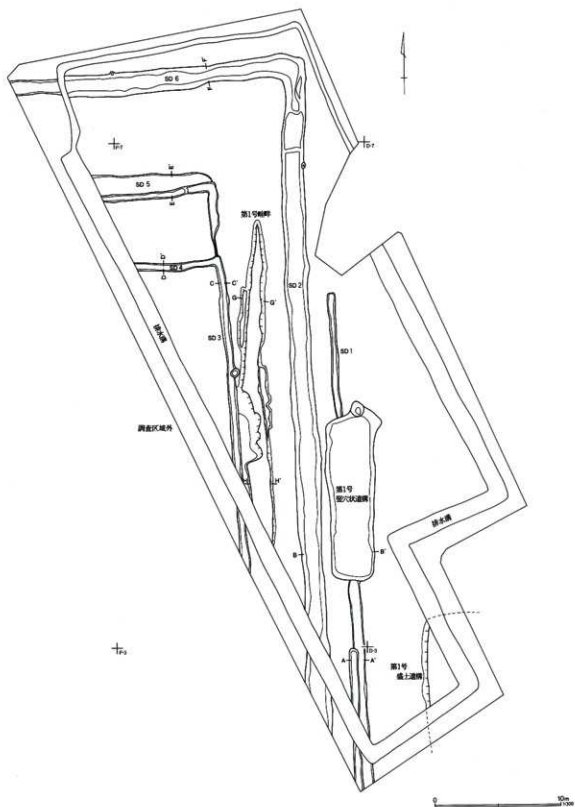
E-4・5グリッドに位置する。SD1を切って構築される。平面形が長方形で、北辺にピットが伴う。長辺の方位は南北方向をさす。底面はほぼ平坦になり、壁はやや開いて立ち上がる。遺構の規模は、長辺13m、短辺3.5m、深さ50cmを測る。覆土は褐灰色土である。

覆土中から第124図4～6が出土した。4は須恵器質の還元焼成された坏底部で、内面全体には厚い黒色釉がかかる。中世以降のものと思われる。5は須恵器の破片で、外面にタタキメの痕が見られる。6は常滑焼の破片である。この遺構の時期は、出土遺物から中世であると思われるが、遺構の性格は不明である。

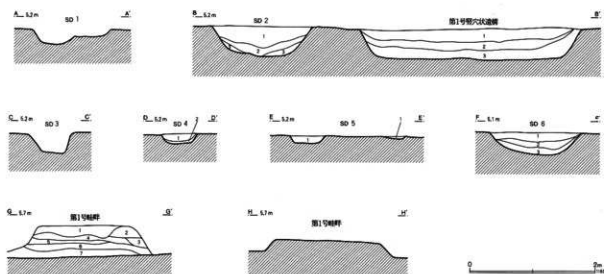
第1号盛土状遺構

D-3・4グリッドに位置する。調査区の南端で検出された遺構で、規模は不明だが、最小でも南北14m、

第122图 A区遺構



第123図 A区遺構土層



第2号溝

- 1 黒褐色土 灰色粒子を少量混入。植物の根による鉄分の沈着がある。粘性強。しまり強。
- 2 黄灰色土 灰色粒子、ブロックを少量混入。植物の根による鉄分の沈着がある。粘性強。しまり強。
- 3 黄灰色土 灰色粒子、ブロックを混入。鉄物の根による鉄分の沈着が多い。戻って2層より褐色味が強い。粘性強。しまり強。

第4号溝

- 1 黒褐色土 鉄分を含む。明るい灰色粒子暗い灰色粒子を混入。粘性強。しまり強。
- 2 黄灰色土 鉄分を多く含む。明るい灰色粒子、小ブロック、暗い灰色粒子を混入。粘性中。しまり強。鉄分のため褐色味が強い。

第5号溝

- 1 黄灰色土 ごく少量の鉄分を含む。炭化物(植物遺体)を含む。明るい灰色粒子、小ブロックを少量混入。粘性強。しまり強。

第6号溝

- 1 黒褐色土 鉄分を多く含む。明るい灰色粒子をごく少量混入。粘性中。しまり強。
- 2 黄灰色土 鉄分を多く含む。褐色粒子を少量含む。明るい灰色粒子、小ブロックを少量混入。粘性中。しまり強。
- 3 黄灰色土 鉄分を含む。少量の炭化粒子を含む。明るい灰色粒子、小ブロックを少量混入。粘性中。しまり強。

第1号型穴遺構

- 1 黄灰色土 褐色粒子が多く2層より褐色味をおびる。粘性強。
- 2 黄灰色土 褐色微粒子の沈着がある。粘性強。
- 3 黄灰色土 褐色微粒子の沈着がある。灰色粒子小ブロックを混入。粘性強。

第1号畦畔

- 1 灰色土 鉄分を含む。褐色粒子を少量含む。明るい灰色粒子を少量と黒褐色粒子、ブロックを混入。粘性強。しまり強。
- 2 黒褐色土 鉄分を多く含む。褐色粒子を少量含む。ごく少量の明るい灰色粒子と多くの灰色粒子、ブロックを混入。粘性強。しまり強。
- 3 灰色土 鉄分、炭化物(植物遺体)、褐色粒子を少量含む。明るい灰色粒子、黒褐色粒子、を少量混入。粘性強。しまり強。
- 4 黒褐色土 鉄分を多く含む。明るい灰色粒子、暗い灰色粒子を少量混入。粘性中。しまり強。
- 5 黄褐色土 鉄分を含む。黄灰色土の粒子を混入。粘性中。しまり中。盛土。鉄分を少量含む。灰色土が主体。今中暗い灰色粘質土とのブロックを多く混入。粘性中。しまり中。
- 6 灰色土 鉄分を少量含む。炭化物層と明るい灰色土層輪状に認められる。灰色粘質土がブロック状に入る。粘性強。しまり強。

第124図 A区出土遺物



東西12mを測る。畦畔と同様の土で盛土されており、畦畔と同時期の遺構と考えられるが、遺構の性格は不明である。

グリッド出土遺物 (第124図 2・3)

2点とも須恵器杯の底部破片で、回転糸切り痕が見られる。

A区出土遺物観察表(第124図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	須恵器環			(6.0)	BW	灰白	A	25	SD6 底部回転糸切り痕
2	須恵器環			(4.6)	針	灰白	A	10	C-4グリッド 底部回転糸切り痕
3	須恵器環			(7.6)		灰白	A	35	C-3グリッド 底部回転糸切り痕
4	須恵器環			4.8	W	灰白	A	100	第1号竪穴状遺構
5	須恵器甕					灰白	A		第1号竪穴状遺構
6	常滑焼壺				W	灰黄褐	A		第1号竪穴状遺構

(2) B区

溝23条、畦畔3条が検出された。これらの遺構は、全て東西方向に伸びる。溝は、同一個所で、2～3条が近接または重複しながら並行し、溝のまとまりとまとまりの間には、9～12mの間隔を保つ。

溝

第7・8号溝(第125図)

調査区南部のF・G・H-10グリッドに位置する。両溝は並行して東西方向にまっすぐに伸びる。比較的浅くて細い溝であり、溝の幅はSD7が0.5m、SD8が0.7m、深さはSD7が8cm、SD8が10cmを測る。遺物は出土しなかった。

第9・10号溝(第125図)

調査区南部に位置し、第3号畦畔の南側に沿って東西方向にまっすぐに伸びる。SD9の南側にはビット状の窪みが溝状に連なっており、もう1条溝があった可能性がある。溝の幅はSD9が1.3m、SD10が1m、深さはSD9が12cm、SD10が13cmを測る。出土遺物は、SD9では須恵器片が、SD10では土師器片が出土したが、いずれも小破片であり、図示できるものはない。

第11号溝(第125図)

G・H・I-13グリッドに位置する。第3号畦畔と同じ方向で伸びながらも重複関係になる。

土層観察からは第3号畦畔を構成する土とSD11の覆土との違いが判別できなかったが、おそらくSD11が第3号畦畔を切っていたものと思われる。

溝は、東西方向にまっすぐに伸びる。溝の幅は0.8m、深さは26cmを測る細長い溝である。覆土は黒褐色土であり、基本土層の第4層に近似する。遺物は出土しなかった。

第12～14号溝(第125・126図)

G-13・14、H-13・14、I-13・14、J-14グリッドに位置する。3条は並行して東西方向にまっすぐに伸びる。土層断面の観察からSD13⇒SD14⇒SD12の新旧関係がわかる。

SD12は他の2条に比べて幅広の溝である。SD14は浅めの溝で、途中で消えてしまう。溝の幅はSD12が2.6m、SD13が0.6m、SD14が0.4mとなる。深さはSD12が20cm、SD13が22cm、SD14が12cmを測る。覆土はいずれも黒褐色土であり、基本土層第4層に近似する。

出土遺物は、SD12の覆土から砥石(第126図3)が出土した。3は4面が面取りされるが、研ぎ面は表面のみである。

第15～17号溝(第127図)

H・I・J-15グリッドに位置する。3条は並行して東西方向にまっすぐに伸びる。西部では第2号畦畔に近接する。

SD15は東部でビット状の凹凸が連なり、西部で途中途切れる。溝の幅は、SD15が0.4m、SD16が0.5m、SD17が0.7mを測る。深さはSD15が12cm、SD16が20cm、SD17が9cmを測る。

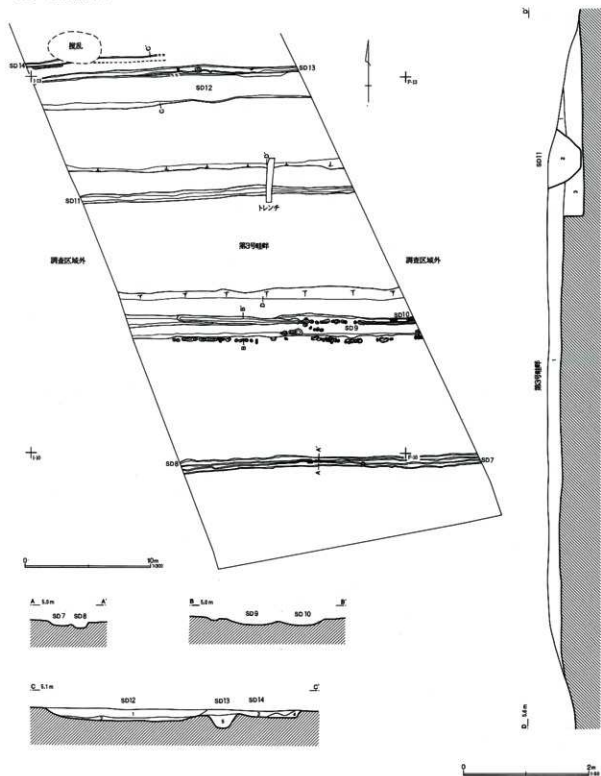
覆土はいずれも黒褐色土であり、基本土層第4層に近似する。遺物は出土しなかった。

第18・19号溝(第127図)

I・J・K-16グリッドに位置する。両溝は並行して東西方向にまっすぐに伸びる。SD18は中央で2条に分かれており、掘り直しによるものと考えられる。

溝の幅は、SD18が0.5m、SD19が0.7m、深さはSD18が10cm、SD19が9cmを測る。覆土はいずれも黒褐色土である。

第125図 B区遺構(1)



第12-13-14号溝

- 1 黒褐色土 シルト質。酸化鉄が縦線に沿った様に縦線状に多く残る。他に成分なく未成土層に近い。
- 2 黒褐色土 第1層にくらべて酸化鉄のまじりがやや少ない。
- 3 黒褐色土 酸化鉄がやや多く、砲山ブロックを含む。SO14の層土と考えられる。
- 4 黒褐色土 酸化鉄を含むもの土ほど多くない。砲山ブロックを多く含む。
- 5 黒褐色土 砲山ブロックを含む。酸化鉄をやや含む。底部近くに、黒色粒子あり。

第3号柱礎 第11号溝

- 1 黒褐色土 酸化鉄を多く含む。他に黒色粒子、黄褐色粒子を含む。酸化鉄、ローム粒子なし。
- 2 黒褐色土 酸化鉄、黒色粒子を含む。1層とほとんど同じ。
- 3 灰ワレ層以上 未成土層。シルト質。黄褐色土、粘質土をブロック状に含む。酸化鉄らしき斑文がある。

第126図 B区遺構(1) 出土遺物



B区遺構(1) 出土遺物観察表(第126図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	須恵器環			(6.2)	W針	オリーブ灰	A	15	G-12グリッド 底部回転切り痕 H-12グリッド
2	須恵器環					BW	A		
3	砥石	長さ3.7cm	幅2.6cm	厚さ1.9cm	重量35.13g	石質粘板岩			SD12

出土遺物は、SD18から土師器小片が1点出土したが、小破片であり、図示できなかった。

第20～22号溝(第128図)

I・J・K-18グリッドに位置する。3条は重複しながら近接して東西方向にまっすぐに伸びる。

SD22は途中溝の掘り直しによる段差が見られる。溝の幅は、SD20が0.9m、SD21が0.6m、SD22が0.7m、深さはSD20が16cm、SD21が15cm、SD22が17cmを測る。覆土はいずれも黒褐色土であり、基本土層第4層に近似する。

出土遺物は、SD22から土師器片が出土したが、小破片であり、図示できなかった。

第23～25号溝(第128図)

I・J・K-18グリッドに位置する。3条は並行して東西方向にまっすぐに伸びるが、SD25は途中で途切れる。約1.5mの間隔を置いて、南側のSD20～22に並行する。

溝の幅は、SD23が0.6m、SD24が0.9m、SD25が0.7m、深さはSD23が28cm、SD24が13cm、SD25が6cmを測る。覆土はいずれも黒褐色土であり、基本土層第4層に近似する。

出土遺物は、SD24から須恵器の破片が出土した。

第28～29号溝(第128図)

調査区の最北部に位置する。4条はほぼ一部重複しながら並行して、東西方向にまっすぐに伸びる。SD28

はやや蛇行しながら伸びる。各溝は所々に数基のピットを伴う。

溝の幅はSD26が0.9m、SD27が0.9m、SD28が0.7m、SD29が0.5mを測り、ほぼ共通する。溝の深さは、SD26が18cm、SD27が22cm、SD28が10cm、SD29が8cmを測る。SD27が最も深い、いずれも浅い溝である。覆土はいずれも黒褐色土であり、基本土層第4層に近似する。

出土遺物は、SD26とSD27から土師器片が各1点、SD29から須恵器の破片が1点出土したが、いずれも小破片であり、図示できなかった。

畦畔

第2号畦畔(第127図)

J-15・16グリッドに位置する。西側は調査区域外におよんでおり、SD15～17に並行しながら東西方向に伸びる様相を呈する。平面形は方形、断面形は台形となって、上部は平坦になる。全長58m、上部幅3.8m、下部幅5.8m、高さ68cmを測る。

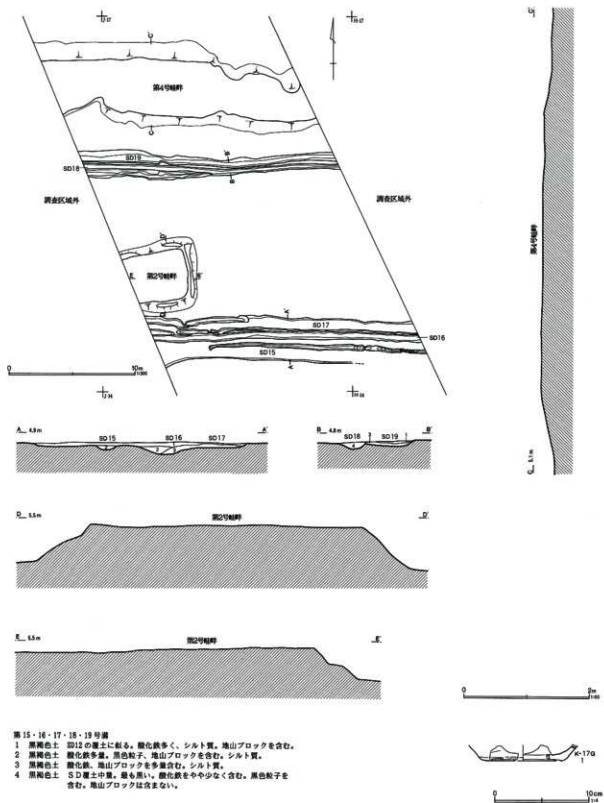
第3号畦畔(第125図)

G・H・I-12・13グリッドに位置する。SD11と同じ方向で伸びながらも重複関係になる。

土層観察からは第3号畦畔を構成する土とSD11の覆土との違いが判別できなかったが、おそらくSD11が第3号畦畔を切っていたものと思われる。

畦畔は、SD9・10に沿うように並行して、東西方

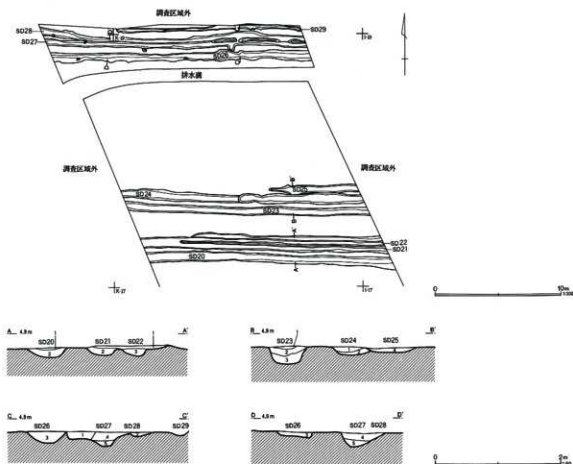
第127図 B区遺構(2)・出土遺物



B区遺構(2) 出土遺物観察表 (第127図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	坏			(8.0)	W砂	橙	A	15	K-17グリッド

第128図 B区遺構 (3)



第20・21・22・23・24・25号溝

- 1 黒褐色土 酸化鉄多量、シルト質。マンガ、黒色粒子含む。
- 2 黒褐色土 酸化鉄粒子状、地山ブロック多量、シルト質。
- 3 黒褐色土 酸化鉄少量、マンガン含む、地山ブロックなし、シルト質。
- 4 黒褐色土 酸化鉄、地山ブロック多量含む、シルト質。

第26・27・28号溝

- 1 黒褐色土 酸化鉄、マンガ、地山ブロック多量。
- 2 黒褐色土 酸化鉄、マンガン中量、粘土ブロック中量含む。
- 3 黒褐色土 酸化鉄中量、マンガン少量、地山ブロックが距離近く多量。
- 4 黒褐色土 酸化鉄多量、マンガン中量、地山ブロック少量。
- 5 黒褐色土 酸化鉄中量、マンガンなし、地山ブロックなし。

向にまっすぐに伸びる。断面形は台形となり、上部はほぼ平坦になる。盛土された土は、黒褐色土で盛土されている。

全長22.0m、上部幅9.5m、下部幅11.0m、高さ43cmを測る。今回検出された畦畔の中で、最も幅が広く、規模が大きい。

第4号畦畔 (第127図)

I・J・K-17グリッドに位置する。裾部の形が整わないが、東西方向にほぼまっすぐに伸びていたものと思われる。約2mの間隔において、SD18・19が並行する。畦畔の形状は、断面形が台形となり、上部は平坦である。遺構の規模は、全長20.0m、上部幅4.5m、

下部幅6.9m、高さ20cmを測る。

グリッド出土遺物 (第126図1・2、第127図1)

第126図1は、須恵器環の底部破片である。小破片であるが、底部には回転糸切り痕が、明瞭に見られる。G-12グリッドから出土したものである。

2は須恵器甕の口縁部破片と思われる。口唇部は外側に突帯状の段がつく。H-12グリッドから出土したものである。

第127図1は、土師器環の底部破片と思われる。底部はやや上げ底風になる。器面はかなり摩耗しているが、内面は横ナアされる。K-17グリッドから出土したものである。

(3) C区

溝26条、畦畔6条、土壌4基が検出された。溝は、SD42を境にして、調査区南部では東西方向に伸びており、調査区北部では南北方向に伸びる。SD36~42は、コの字状または長方形に巡る一連の溝であり、南北幅は約12mを測る。さらに、SD33~35のままとまりの間にも約10mの間隔があることから、同様に長方形の区画になるものと考えられる。数条の溝のままとまりは、一定の時間幅の中で、繰り返し掘り直された結果である可能性が考えられる。

溝

第30・31号溝 (第129図)

M・Lー21グリッドに位置する。両溝は約1mの間隔を持って並行し、ほぼ東西方向に伸びるが、SD31は東側でややカーブする。溝の幅はSD30が0.6m、SD31が0.5m、深さはSD30が9cm、SD31が13cmを測る。遺物は出土しなかった。

第32号溝 (第129図)

Mー22グリッドに位置する。第9号畦畔に重複するが畦田関係は不明である。東西方向に伸びて、東側で浅くなって途切れる。溝の幅は0.7m、深さは7cmを測る。覆土は黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

第33~35号溝 (第129図)

K・L・M・Nー22グリッドに位置する。3条は互いに等間隔に並行して、東西方向にまっすぐに伸びる。SD34はやや幅広くなり、段差を持ってさらに深くなる。溝の幅は、SD33が0.8m、SD34が1.2m、SD35が0.7mを測る。深さは、SD33が14cm、SD34が24cm、SD35が8cmを測る。覆土はいずれも黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

第36・37号溝 (第130図)

L・M・Nー23グリッドに位置する。両溝はSD38とともに並行して東西方向にまっすぐに伸びて、西側で南方向に直角に折れ曲がる。溝の幅はともに0.7mで、深さは、SD36が9cm、SD37が19cmを測る。覆土はいずれも黒褐色土である。SD37から土師器の小片が1点出土した。

第38号溝 (第130図)

SD36・37とSD41・42の内側に沿ってコの字状に巡る溝である。SD36・37に並行して東西方向にまっすぐに伸びて、西側で北方向に直角に折れ曲がり、さらにSD41・42に並行して東方向に直角に折れ曲がる。

溝の幅は0.8m、深さは27cmを測る。覆土は黒褐色土である。出土遺物は、土師器片が2点出土したが、小破片のため、図示できない。

第39号溝 (第130図)

Nー23・24・25グリッドに位置する。SD38とSD40の間を並行して、南北方向にまっすぐに伸びており、北側でSD41に接続する。

溝の幅は0.9m、深さは30cmを測る。覆土は黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

第40号溝 (第130図)

Nー24・25、Oー25グリッドに位置する。SD38・39に並行して南北方向にまっすぐに伸びており、北側でSD41・42に並行して直角に折れ曲がる。

溝の幅は0.6m、深さは16cmを測る。覆土は黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

第41・42号溝 (第130図)

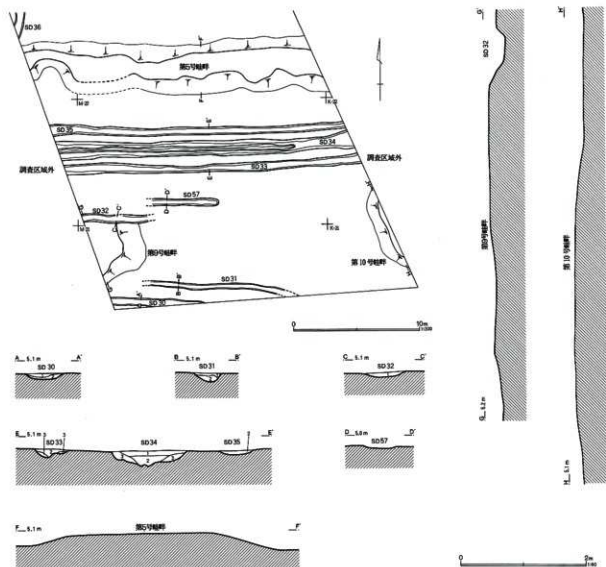
L・M・N・Oー25グリッドに位置する。両溝はSD38・40とともに並行して東西方向にまっすぐに伸びる。SD41は西側でSD39と接続する。

溝の幅はSD41が0.7m、SD42が0.9m、深さはSD41が20cm、SD42が13cmを測る。覆土はいずれも黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

第43・44号溝 (第131図)

Nー27・28グリッドに位置する。両溝は約1mの間隔で南北方向にやや蛇行しながら伸びて、南部で同じ長さで途切れる。溝の幅はSD44が1.7m、SD44が1.2mで、SD43のほうがやや幅広い。溝の深さは、SD43が24cm、SD44が8cmを測る。覆土はいずれも黒褐色土である。SD43から土師器片(第131図2)が出土した。2は杯の胴下部の破片と思われる。器面は摩耗が激しく、調整痕は観察できない。

第129図 C区遺構(1)



第30号溝

- 1 黒褐色土 炭化物細少量、酸化鉄多量、マンガン中量、シルト質、粘土小ブロック中量、粘性中やあり。
- 2 黄褐色土 酸化鉄多量、マンガン少量、他に黒色細粒子少量、粘性あり。

第31号溝

- 1 黄褐色土 酸化鉄多量、マンガン少量、黒色細粒子少量、粘性あり。
- 2 黒褐色土 酸化鉄多量、炭化物中量、シルト質、粘土小ブロック中量。

第32号溝

- 1 黒褐色土 酸化鉄多量、マンガン中量、炭化物細少量、シルト質、小ブロック中量、火山灰まじり風、粘質の覆土ではない。

第33・34・35号溝

- 1 黒褐色土 酸化鉄多量、マンガン、黒色細粒子少量、シルト質、粘土粒子少量、粘性あり。
- 2 黒褐色土 酸化鉄中～多量、マンガン細粒子、黒褐色多量、シルト質、粘土大ブロック中量、粘性あり。
- 3 暗灰黄色土 酸化鉄多量、黒色細粒子多量、シルト質、粘土大ブロック中量。

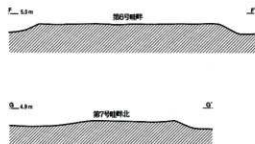
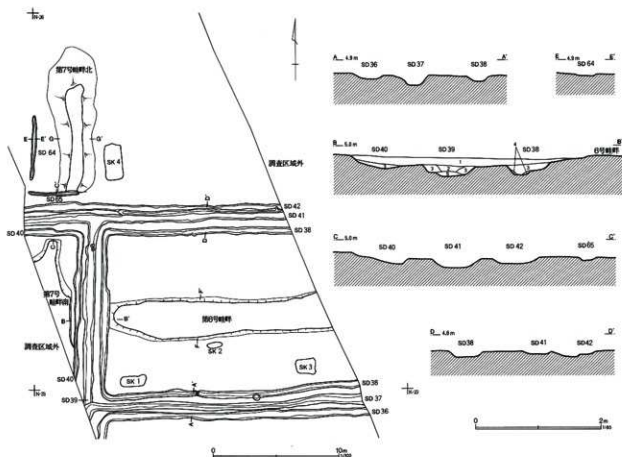
第45・46号溝(第131図)

O-27・28・29グリッドに位置する。両溝は0.7~1.2 mの間隔で南北方向にやや蛇行しながら伸びる。SD 46は南部で掘り直しによるものと思われる。溝の分岐がある。溝の幅はSD 45が0.4m、SD 46が0.8m、深さはともに4cmを測る。覆土はいずれも黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

第47~50号溝(第131図)

P-28・29・30グリッドに位置する。4条は並行して南北方向にまっすぐに伸びる。SD 47とSD 48は南部で合流して1条になる。SD 50は掘り直しによると思われる段差がある。SD 47は、幅0.7m、深さ8cm、SD 48は幅0.3m、深さ8cm、SD 49は幅0.8m、深さ6cm、SD 50は幅1m、深さ28cmを測る。覆土はいずれも

第130図 C区遺構(2)・出土遺物



第38・39・40号

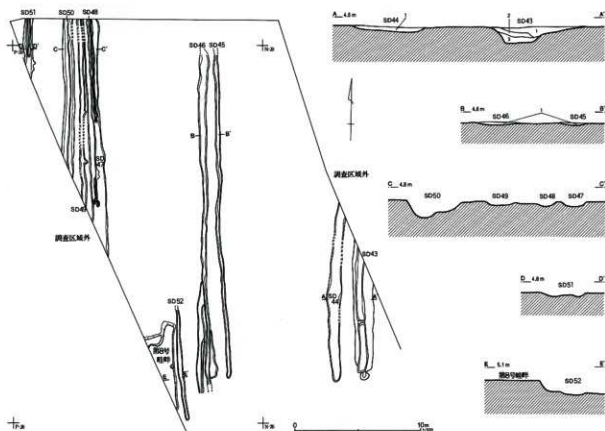
- 1 黒褐色土 酸化鉄中量、炭化物少量、シルト質、粘土小ブロック少量、粘性ややあり。
- 2 黒褐色土 酸化鉄少量、マンガン中量、シルト質、粘土小ブロック中量、粘性ややあり。
- 3 黒褐色土 酸化鉄中量、炭化物少量、シルト質、粘土小ブロック少量、粘性ややあり。
- 4 黒褐色土 酸化鉄中量、炭化物少量、シルト質、粘土小ブロック多量、粘性ややあり。
- 5 黒褐色土 酸化鉄中量、酸化鉄粒子あり、マンガン、炭化物、シルト、粘土は含まない、粘性あり。



C区遺構(2) 出土遺物観察表 (第130図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	須恵器甕			(10.2)	針褐	灰	A	15	L-23グリッド
2	環			(6.4)	明褐	灰	A	25	第7号畦畔
3	ぐい呑み	(7.2)			灰白	灰	A	25	第6号畦畔

第131図 C区遺構(3)・出土遺物



第43・44号溝

- 1 黒褐色土 炭化鉄中量、炭化物少量、基本土層田層ブロック多量、粘性ややあり。
- 2 黒褐色土 炭化鉄多量、炭化物少量、基本土層田層粒子、ブロック少量、粘性ややあり。
- 3 黒褐色土 炭化鉄多量、マンガングリ子中量、炭化物は含まない、基本土層田層小ブロック少量、粘性あり。

第45・46号溝

- 1 黒褐色土 炭化鉄多量、炭化物、黒色粒子、マンガングリ少量、粘性ややあり。

0 2m



0 10cm

C区遺構(3) 出土遺物観察表(第131図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	須恵器環			(6.8)	針	灰	A	20	SD50
2	環			(6.1)	砂	暗オリーブ灰	A	30	SD43

れも黒褐色土である。SD50から須恵器環の底部破片(第131図1)が出土した。1は底部に回転糸切り痕が見られる。

第51号溝(第131図)

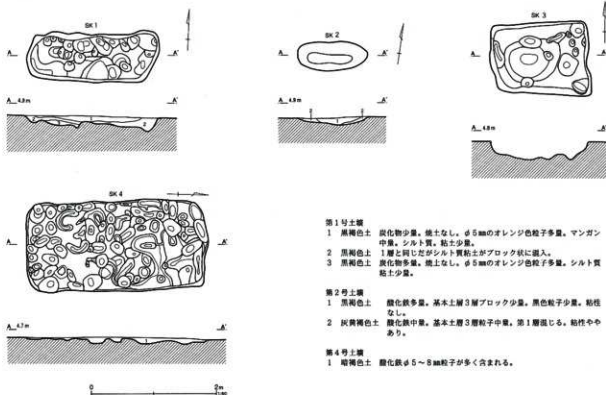
P-29・30グリッドに位置する。SD50に並行して南北方向にまっすぐに伸びる。溝の幅は0.7m、深さは7cmを測る。覆土は黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

第52号溝(第131図)

O-27グリッドに位置する。第8号畦畔の東側に沿って南北方向に伸びる。東側には約1.5mの間をおいて、SD46が並行する。やや蛇行しながら伸びて、北側で浅くなって途切れる。南側では、ややカーブして途切れる。

溝の幅は0.4m、深さは13cmを測る。覆土は黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

第132図 C区土壌



第1号土層

- 1 黒褐色土 炭化物少量、粘土なし、 ϕ 5mmのオレンジ色粒子少量、マンガン中量、シルト質、粘土少量。
- 2 黒褐色土 1層と同じだがシルト質粘土がブロック状に混入。
- 3 黒褐色土 炭化物少量、粘土なし、 ϕ 5mmのオレンジ色粒子少量、シルト質粘土少量。

第2号土層

- 1 黒褐色土 腐化鉄少量、基本土層3層ブロック少量、黒色粒子少量、粘性なし。
- 2 灰黄褐色土 腐化鉄中量、基本土層3層粒子中量、第1層混じる、粘性ややあり。

第4号土層

- 1 暗褐色土 腐化鉄 ϕ 5~8mm粒子が多く含まれる。

第57号溝 (第129図)

L・M-22グリッドに位置する。東西方向にまっすぐに伸びて、西側で浅くなって途切れる。北側には、約2mの間隔でSD33と並行する。

溝の幅は0.6m、深さは5cmを測る。遺物は出土しなかった。

第64号溝 (第130図)

N-25・26グリッドに位置する。東側には第8号畦畔が約2mの間隔をおいて並行する。南側では、SD65にぶつかる手前で途切れる。溝は南北方向に、ほぼまっすぐに伸びる。

溝の幅は0.3m、深さは3cmを測る。遺物は出土しなかった。

第65号溝 (第130図)

N・O-25グリッドに位置する。東西方向にまっすぐに伸びて、東側で第7号畦畔に接する。西側は、SD64にぶつかる手前で途切れる。

溝の幅は0.3m、深さは5cmを測る。遺物は出土しなかった。

畦畔

第5号畦畔 (第129図)

K・L・M・N-23グリッドにかけて位置する。南側の裾部は整わず蛇行するものの、東西方向にはほぼまっすぐに伸びる。断面形は台形になり、上部は平坦になる。全長23m、上部幅2.7m、下部幅4.3m、高さ26cmを測る。

第6号畦畔 (第130図)

L・M・N-24グリッドに位置する。東西方向にはほぼまっすぐに伸びて、SD38と重複して途切れる。断面形は台形になり、上部は平坦になる。全長18m、上部幅2.8m、下部幅3.5m、高さ16cmを測る。畦畔上からぐい呑みの小破片 (第130図3) が出土した。

第7号畦畔 (第130図)

N-24・25・26、O-25グリッドに位置する。途中SD40・41・42・65に切られて途切れながら、南北方向に伸びる。断面形は低い台形になる。上部幅1m、下部幅3.9m、高さ12cmを測る。畦畔上から土師器環の底部破片 (第130図2) が出土した。

第8号畦畔(第131図)

O-27グリッドに位置する。SD52に沿って南北方向に伸びる。断面形は台形で、上部は平坦になる。全長6.8m、幅2.4m、高さ26cmを測る。

第9号畦畔(第129図)

M-21・22グリッドに位置する。西側が調査区域外に伸びる。SD32と重複するが、新旧関係は不明である。断面形は台形で、上部は平坦になる。全長4m、上部幅4.2m、下部幅5.2m、高さ14cmを測る。

第10号畦畔(第129図)

K-21・22グリッドに位置する。ほとんどが東側調査区域外におよぶ。裾部はなだらかに開き、低く盛りされる。全長1.4m、幅6.9m、高さ14cmを測る。

土壌(第132図)

第1号土壌

N-24グリッドに位置する。平面形は長方形である。規模は、長辺2.1m、短辺0.8m、深さ13cmになる。主軸方位はN-84°-Eを測る。底面は凹凸が激しい。覆土は黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

第2号土壌

M-24グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長辺1.1m、短辺0.5m、深さ11cmになる。主軸方位はN-82°-Eを測る。底面は船底状に浅く窪む。覆土は黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

第3号土壌

L-24グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は長辺1.6m、短辺1.2m、深さ32cmになる。主軸方位はN-90°-Eを測る。底面は凹凸が激しく、壁は垂直に立ち上がる。遺物は出土しなかった。

第4号土壌

N-25グリッドに位置する。平面形は長方形である。規模は長辺2.9m、短辺1.5m、深さ4cmになる。主軸方位はN-3°-Wを測る。底面は凹凸が激しい。覆土は暗褐色土である。遺物は出土しなかった。

グリッド出土遺物(第130図1)

L-23グリッドから須恵器片が出土した。1は甕または瓶の底部破片と思われる。

(4) D区(第133図)

溝10条が検出された。SD56を除いて、全ての溝が南北方向に伸びており、2~3条で、ひとつのまとまりになる。SD62とSD61の間は約7m、SD58とSD55との間は約8m、SD54とSD53との間は約10mを測り、ほぼ一定の間隔をおいて伸びている。溝の幅は、0.3~1.0m、深さは10cmでほぼ一定した細く浅い溝になる。覆土は、ほとんどが黒色土で、基本土層第III層の土が混入する。

出土遺物は、SD55の覆土中から常滑焼の破片が1点出土した他、まったく見られなかった。

SD54・55は、C区では位置的に見て、SD51に繋がるものと思われる。同様に、E区を見てみると、SD62・63はそれぞれSD69・71に繋がっていくものと思われる。SD58-61はSD66・68のまとまりに繋がっていく。このように、溝は広範囲に同一方向で伸びており、地割りを目的とした溝と考えるに充分なる特徴を備えている。

第53号溝

O-31・32グリッドに位置する。南北方向にほぼまっすぐに伸びて、北側で細くなり、ややカーブして調査区域外に伸びる。南部で途切れる。

溝の幅は1m、深さは9cmを測り、他の溝と比較してやや幅広く浅い溝になる。

覆土は黒色土で、基本土層第III層の土がブロック状に多く混入する。遺物は出土しなかった。

第54~58号溝

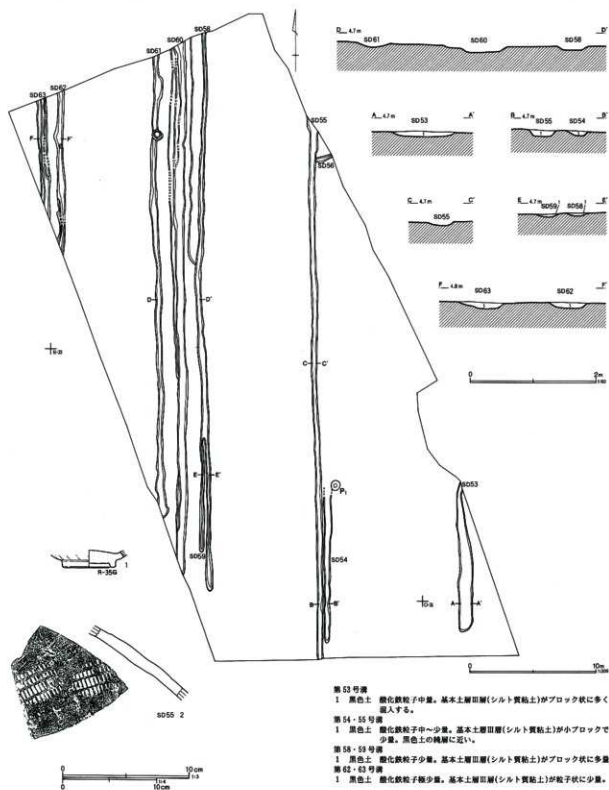
SD54・55は近接して並行して伸びており、他の溝からは、一定の間隔をおいて位置する。

SD55は、調査区中央やや東側に位置し、南北方向にまっすぐに伸びる。SD54は、SD55の南部で並行して短く伸びて、北側でPの手前で浅くなって途切れる。SD56は、SD55の北部で異なる方向に伸びて重複する。

SD54・55は、C区では位置的に見て、SD51に繋がるものと思われる。

溝の幅は、SD54が0.6m、SD55が0.4m、SD56

第133図 D区遺構・出土遺物



D区出土遺物観察表(第133図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	青磁			(5.7)		明緑灰	A	25	R-35グリッド
2	常滑焼壺				W	灰赤	A		SD55

が0.3mを測る。深さは、SD54が7cm、SD55が10cm、SD56が4cmを測る。

覆土は、SD54・55の覆土は、黒色土で、基本土層第III層の土をブロック状に少量混入する。

出土遺物は、SD55の覆土中から、常滑焼の壺または甕の破片(第133図2)が出土した。2は、壺または甕の胴上部の破片である。外面には格子状の押捺文がつく。内面は横方向のナデ痕が見られる。

第58～61号溝

調査区中央のやや西側に位置する。4条は並行して南北方向にまっすぐに伸びており、他の溝との間に一定の間隔を持つ。

SD58・59は、南側で途切れ、SD59は、途中SD58に合流する。SD60は、掘り直しによると思われる段差が見られる。SD61は、北部でピットと重複する。SD58・60・61の3条は、約1mの間隔で互いに並行して伸びる。SD58～61は、E区ではSD66・68のままとまりに繋がっていく。

溝の幅は、SD58が0.5m、SD59が0.3m、SD60が1m、SD61が0.5mを測る。深さは、SD58が6cm、SD59が4cm、SD60が10cm、SD61が6cmを測る。覆土はいずれも黒色土で、基本土層第III層の土をブロック状に混入する。4条ともに、遺物はまったく出土しなかった。

第62・63号溝

調査区北西部に位置する。両溝は並行して南北方向にまっすぐに伸びる。両溝は、E区ではSD69・71に繋がっていくものと思われる。

溝の幅は、SD62が0.7m、SD63が0.6m、深さは、SD62が9cm、SD63が10cmを測る。覆土はいずれも黒色土で、基本土層第III層の土を少量混入する。遺物は出土しなかった。

グリッド出土遺物(第133図1)

遺構外で出土した遺物は1点である。1は青磁の底部破片である。高台がつくもので、底部近くの外面が花卉状に盛り上がる。R-35グリッドから出土したものである。

(5) E区(第134図)

溝25条が検出された。多くの溝が南北方向に伸びており、調査区北部でSD86・87が東西方向に伸びることで、全体として長方形の区画溝を構成する。南北方向に伸びる溝は、他の調査区の溝と同様に、数条のままとまりをもっており、ままとまり同士では一定の間隔が保たれている。

第66号溝

Q-37・38グリッドに位置する。南北方向にやや蛇行しながら伸びて、南側で途切れる。SD121・122に並行する。南方はD区のSD58に繋がっていくものと思われる。

溝の幅は0.6m、深さは10cmを測る。覆土は黒色土である。遺物は出土しなかった。

第67号溝

R-36グリッドに位置する。SD69の南部に重複して東西方向に短く伸びる。溝の幅は0.4m、深さは5cmを測る。遺物は出土しなかった。

第68号溝

R-36・37・38グリッドに位置する。南北方向にやや蛇行しながら伸びる。東側のSD66に並行する。D区のSD61に繋がっていくものと思われる。

溝の幅は0.8m、深さは5cmを測る。覆土中から須恵器環の破片(第134図2)が出土した。

第69～73号溝

調査区の中央東よりに位置し、5条が並行しながら南北方向におさまるまっすぐに伸びる。

溝の幅はSD69が1m、SD70が0.9m、SD71が0.8m、SD72が1m、SD73が0.5mを測る。深さはSD69が6cm、SD70が12cm、SD71が18cm、SD72が12cm、SD73が6cmを測る。覆土は砂粒の多い黒色土である。

出土遺物は、SD71から須恵器甕の破片が出土した。

第74・76～79号溝

調査区の中央西よりに位置し、5条が並行しながら南北方向におさまるまっすぐに伸びる。北部ではUターン状に折れ曲がる。